大崎後原遺跡２

－福岡県小郡市大崎所在遺跡の調査報告－

小郡市文化財調査報告書第256集

2011

小郡市教育委員会

大崎後原遺跡２

－福岡県小郡市大崎所在遺跡の調査報告－

小郡市文化財調査報告書第256集

2011

小郡市教育委員会

序　文

本書は、宅地造成事業に先立って、小郡市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

本遺跡が所在する小郡市大崎地区では、これまでの調査で弥生時代から中世に至るまで多くの遺跡が存在することが知られています。

ここに報告いたします「大崎後原遺跡２」では、弥生時代中期後半から末頃にかけての井戸や、土器などが廃棄された溝などの遺構と共に多くの遺物も確認され、良好な資料を得ることができました。

今回得られた成果が今後末永く活用され、この報告書が文化財愛護思想の普及に寄与することになれば幸いです。

最後に、地権者の小牧剛さん、片山浩さん、江越渉さん、調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、そして現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々に感謝を申し上げ、序文といたします。

平成 23 年 3 月 31 日

小郡市教育委員会

教育長　清武 輝

例　言

1．本書は、小郡市大崎地内における宅地造成事業に伴って、小郡市教育委員会が平成 21 年度に発掘調査を行った大崎後原遺跡２Ａ・２Ｂ・２Ｃの報告書である。調査期間は、平成 21 年７月６日から同年８月 18 日までである。

2．整理作業は、平成 22 年度国庫補助事業として実施した。

3．遺構の実測及び写真撮影は、坂井貴志・田中良輔が実施した。

4．遺物の復元・実測・製図には、坂井・西江幸子の他に馬田妙子、宮崎美穂子、柳美保幸、衛藤知嘉子、佐々木智子、原野照子、井上千代美、永倉さゆみ、林田和也、長野智恵子ら諸氏に多大なる協力を得た。

5．遺物の写真撮影は（有）文化財写真工房に委託した。

6．本書に記載した遺構略号は、ＳＢ：掘立柱建物跡、ＳＫ：土坑、ＳＥ：井戸、ＳＤ：溝、Ｐ：ピットである。

7．遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に則している。

8．土器実測図のうち中軸線の左右に白抜きのあるものは、口径の残存が 1/6 以下、あるいは、口径の推定が困難なものである。

9．遺物・実測図・写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。

10．本書の執筆は、第１章・第２章・第３章１・２の遺構、第４章１・２の遺構、第５章１・２の遺構を坂井が、第３章２の遺物、第４章２の遺物、第５章２の遺物、第６章を西江が担当し、編集は坂井・西江が担当した。

本文目次

第1章　調査の経過と組織・・・・・・・・・・・1
第2章　位置と環境・・・・・・・・・・・・・・2
第3章　大崎後原遺跡２A区の調査・・・・・・・5
　1　調査の概要
　2　遺構と遺物
第4章　大崎後原遺跡２B区の調査・・・・・・・13
　1　調査の概要
　2　遺構と遺物
第5章　大崎後原遺跡２C区の調査・・・・・・・・・15
　1　調査の概要
　2　遺構と遺物
第6章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・27
　1　各遺構の年代と大崎後原遺跡の広がりについて
　2　小郡市中・南部における弥生時代中期の遺跡動向

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図（S＝1／25,000）
第2図　大崎後原遺跡２　調査区位置図（S＝1／5,000）
第3図　大崎後原遺跡２　遺構配置図（S＝1／100）
第4図　２A区SK－1・3～5実測図（S＝1／40）
第5図　２A区SE－1～3実測図（S＝1／40）
第6図　２A区SK－2、SD－1実測図（S＝1／40）
第7図　２A区SK－1・3、SE－1・2、SD－1
　出土土器実測図（S＝1／4）
第8図　２A区SE－2出土木製品実測図
　（1：S＝1／4、２・3：S＝1／6）
第9図　２A区SE－2出土編組品実測図（S＝1／1）
第10図　２B区SK－1実測図（S＝1／40）
第11図　２B区SD－1出土土器実測図（S＝1／4）
第12図　２B区SD－1実測図（S＝1／40）
第13図　２C区SB－1実測図（S＝1／40）
第14図　２C区SK－1・2実測図（S＝1／40）
第15図　２C区SE－1実測図（S＝1／40）
第16図　２C区SD－1実測図（S＝1／40）
第17図　２C区SD－1上層出土土器実測図①（S＝1／4）
第18図　２C区SD－1上層出土土器実測図②（S＝1／4）
第19図　２C区SD－1中・下層出土土器実測図①（S＝1／4）
第20図　２C区SD－1中・下層出土土器実測図②（S＝1／4）
第21図　２C区SD－1中・下層出土土器実測図③（S＝1／4）
第22図　２C区SD－1中・下層出土土器実測図④（S＝1／4）
第23図　２C区SD－1出土石器実測図
　（1：S＝1／2、２・3：S＝1／4）
第24図　小郡市中・南部の弥生時代中期の遺跡分布
第25図　小郡市中・南部の須玖Ⅰ式段階の遺跡分布
第26図　小郡市中・南部の須玖Ⅱ式段階の遺跡分布

表目次

表1　大崎後原遺跡２　出土土器観察表
表2　大崎後原遺跡２　出土石器観察表
表3　大崎後原遺跡２　出土木製品観察表

図版目次

図版1　２A区遺構写真（全景、SK－1土層、SK－1完掘、SK－2土層・完掘、SK－3完掘）
図版2　２A区遺構写真（SK－4土層、SK－4完掘、SK－5土層、SK－5完掘、SE－1土層、SE－1完掘、SE－2土層、SE－2完掘）
図版3　２A区遺構写真（SE－2下層・建築材、SE－3土層、SD－1土層、SD－1完掘）
図版4　２B区遺構写真（全景、SD－1A－A′土層、SD－1B－B′土層、SD－1C－C′土層、SD－1完掘）
図版5　２C区遺構写真（全景、SB－1P1土層、SB－1P2土層、SB－1P3土層、SB－1P4土層）
図版6　２C区遺構写真（SB－1P5土層、SB－1P6土層、SB－1P7土層、SB－1全景、SK－1完掘、SK－2土層、SK－2完掘、SE－1土層・完掘）
図版7　２C区遺構写真（SD－1A－A′土層、SD－1B－B′土層、SD－1全景）
図版8　２A区出土土器・木器・編組品
図版9　２B区出土土器、２C区出土土器
図版10　２C区出土土器
図版11　２C区出土土器・石器

第１章　調査の経過と組織

大崎後原遺跡２の調査は、宅地造成事業に先立ち、平成 19 年 10 月 24 日付で小郡市教育委員会に対して埋蔵文化財の有無について照会があったことを端緒とする（審査番号 7087）。市教委では、これを受けて平成 19 年 11 月 9 日に申請地の試掘調査を行った。その結果、申請地ほぼ全域、地表下 30㎝ ～ 95㎝ 下で遺構が確認された。当初は道路造成部分についてのみ開発を行うことで、発掘調査（大崎後原遺跡・平成 20 年調査）を行っている。

平成 21 年 5 月･7 月に、宅地部分３箇所についても造成を行うとの申請が上がり、再度協議を行った。結果、建物の基礎部分が遺構面まで達する上、計画変更もできないとのことであったため、３箇所を２Ａ・２Ｂ・２Ｃ区として発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。

調査期間は、平成 21 年 7 月 6 日～ 7 月 29 日（大崎後原遺跡２Ａ・２Ｂ）、同年 7 月 29 日～ 8 月 18 日（大崎後原遺跡２Ｃ）である。

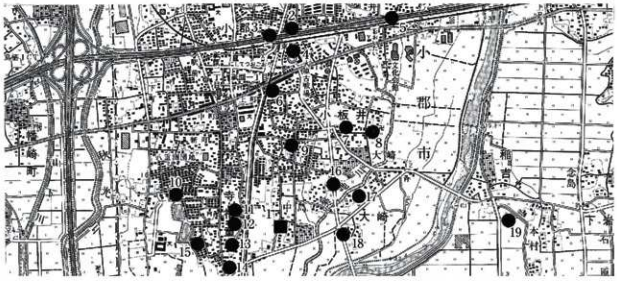
〔調査組織〕

平成 21 年度
小郡市教育委員会
教 育 長　清武　輝
教育部長　高木　良郎
文化財課　課　　長　田篭千代太
係　　長　片岡　宏二
嘱託技師　坂井　貴志
嘱託技師　田中　良輔
（現　彦根市教育委員会）

平成 22 年度
小郡市教育委員会
教 育 長　清武　輝
教育部長　河原　寿一郎
文化財課　課　　長　田篭　千代太
係　　長　片岡　宏二
技　　師　西江　幸子
嘱託技師　坂井　貴志

〔発掘作業従事者〕

伊東　みさ子、草場　誠子、田中　賢二、土井　久江、中村　国義、山本　絹子、横田　雅江



１．大崎後原遺跡１・２　　２．向築地遺跡　　３．小郡前伏遺跡　　４．小板井蓮輪遺跡２
５．大板井遺跡　　６．小板井京塚遺跡　　７．小板井蓮輪遺跡　　８．小板井屋敷遺跡
９．大崎井牟田遺跡　　10．寺福童遺跡５　　11．寺福童遺跡３　　12．寺福童遺跡４
13．寺福童内畑下道東遺跡　　14．寺福童遺跡　　15．寺福童遺跡２　　16．大崎小園遺跡
17．大崎遺跡　　18．大崎中ノ前遺跡１・２　　19．稲吉元矢次遺跡

第１図　周辺遺跡分布図（Ｓ＝１／25,000）

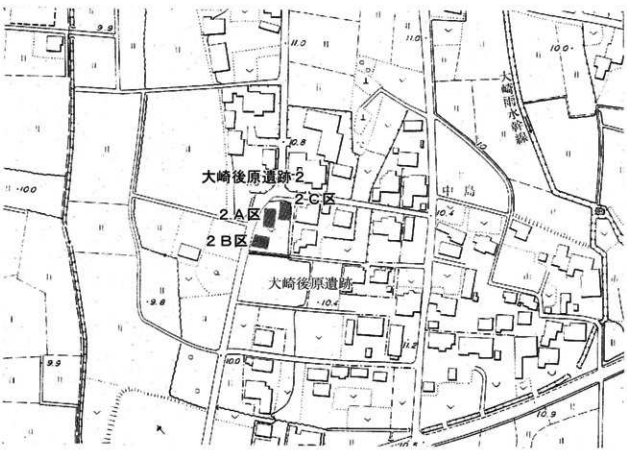
第２章　位置と環境

大崎後原遺跡２は、宝満川の西岸、三国丘陵からなだらかに続く低台地上の縁辺部に位置する。標高は 11m 前後を測り、西側に広がる水田面から若干高い箇所になる。

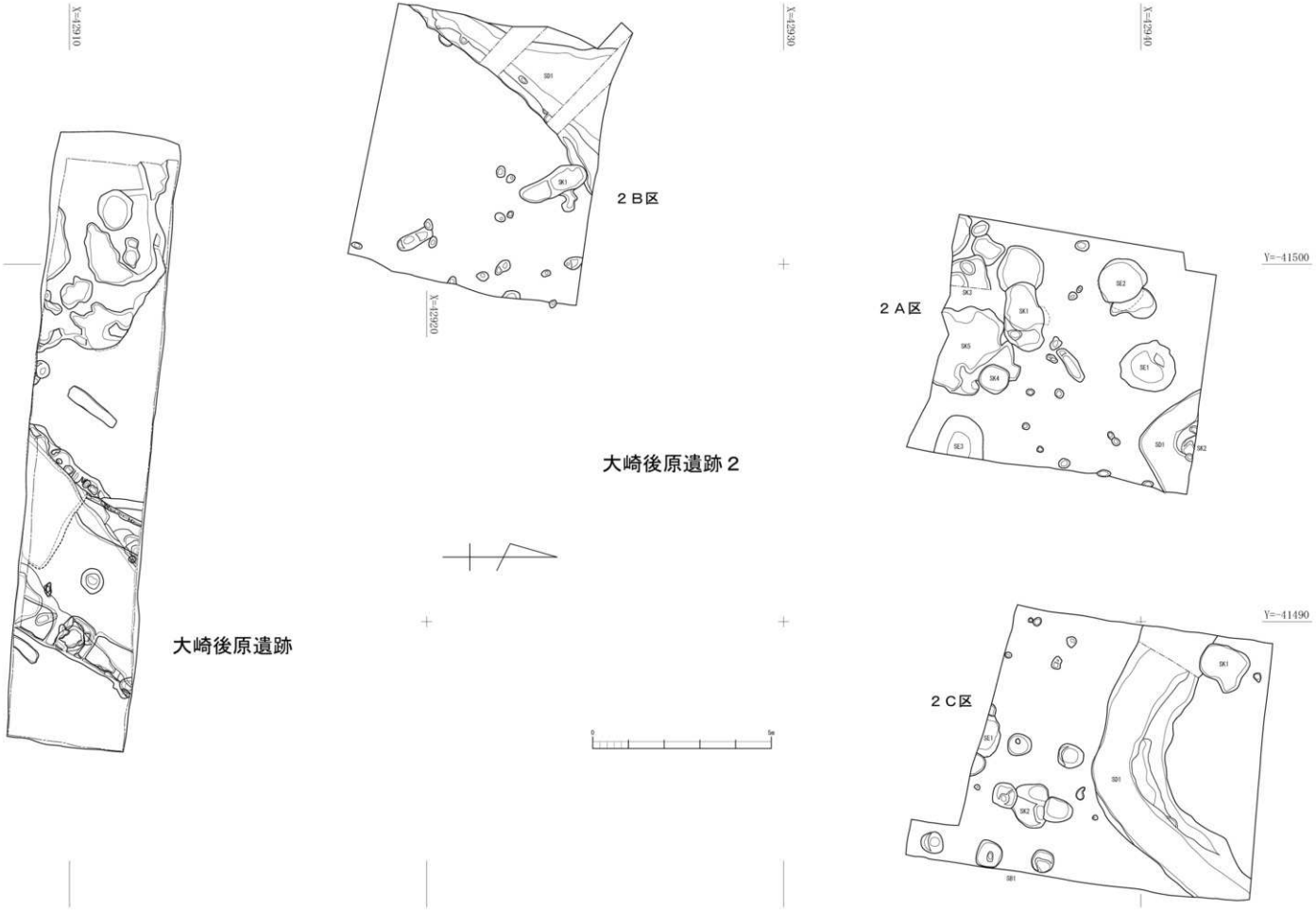
大崎地区周辺には、市内でも主要な遺跡が多数存在している。**大崎井牟田遺跡（９）**は市内でも希少な縄文時代遺跡の一つで、押型文土器が集石炉に伴って出土している。**大崎中ノ前遺跡２（18）**は、弥生時代中期前半～後期初頭にかけての集落跡で、竪穴住居や土坑、掘立柱建物が検出された。土坑の幾つかは「貯木土坑」と考えられ、赤・黒漆塗りの木製品や木製鍬が出土している。**大崎小園遺跡（16）**は古墳時代初頭から後期にわたる集落遺跡で、古墳時代初頭にあたる竪穴住居からは在地形の土器に伴って畿内系の土器が出土している。以上のように、大崎地区では各時代を通じて集落が形成されてきた点が特徴として挙げられる。

当地の西側には南から谷が入り込んでいるが、その谷を挟んだ対岸部分の寺福童地区では、古墳時代初頭の方形周溝墓に代表されるように、墓地・埋葬遺構が多く確認されている。特に**寺福童遺跡５地点（10）**では、弥生時代早期の木棺墓群、弥生時代中期～後期の甕棺墓・土壙墓、そして古墳時代初頭にかけての石棺墓・方形周溝墓に至るまで、各時期の墓地が連綿と営まれており、墓域としての性格を際立たせている。また**寺福童遺跡４地点（12）**では、中広形銅戈９本が埋納されたままの状態で検出され、時期によっては「祭域」としての性格も併せ持つ地域であったことがわかる。

大崎地区では、埋葬遺構のまとまった検出例がなく、逆に対岸の寺福童地区では集落遺構の検出に乏しいことから「集落域」「墓域」という相関関係の存在の可能性がこれまでにも指摘されてきた。今後も両地域の遺跡の動向を詳細に解明する必要がある。



第２図　大崎後原遺跡２　調査区位置図（Ｓ＝１／５,０００）



第３図　大崎後原遺跡２　遺構配置図（Ｓ＝1／100）

第３章　大崎後原遺跡２Ａ区の調査

１　調査の概要

調査地は、標高 11.2 m前後、遺構検出面で 10.5 m前後を測り、緩やかに西に向けて傾斜する。

遺構検出面は淡茶褐色ローム層である。基本層序は造成土、黒褐色土、黒色シルトの包含層、その下で淡茶褐色ロームの地山面となる。さらに掘削していくと黄褐色土・淡黄白色の砂へ変わっていく。

検出した遺構は、土坑５基、井戸３基、溝１条、ピット多数である。

２　遺構と遺物

（１）土坑 【ＳＫ】

ＳＫ－１（第４図、図版１）

ＳＫ－１は、調査区中央部付近にて検出した 1.95 m× 1.2 mの東西に長い楕円形を呈する土坑である。検出面から底面までは約 30cm と浅い。

出土遺物

土器（第７図）

１は口径 27.8 cmの土師器の甕である。口縁端部は隅丸状を呈し、形成後余った粘土を外面側に伸ばし、ナデたと考えられる痕跡が残存している。外面は縦方向のハケメ、内面は口縁部から頸部にハケメ、胴部にヘラ削りを施している。内外面の口縁部から頸部の一部に、焼成時についたと考えられるススが付着している。２は土師器の甑か甕の把手である。外面は把手に指押さえ、胴部は把手部分に向かって工具状のものでナデ上げている。内面胴部はヘラ削りが施されている。形態的特徴より、古墳時代後期後半～末に相当すると考えられる。

ＳＫ－２（第６図、図版１）

ＳＫ－２は調査区北部壁際にて検出した。ＳＤ－１を切る。調査区壁に掛かるため詳細は不明であるが、径 60cm 程度の不整円形を呈するものであろう。検出面から底面までの深さは 30cm 程度と浅い。

遺物の出土はない。

ＳＫ－３（第４図、図版１）

ＳＫ－３は調査区南部壁際にて検出した。調査区壁・試掘トレンチに掛かるため詳細は不明であるが、不整円形を呈するものであろうか。

出土遺物

土器（第７図）

３は口径 11.4cm の土師器の甕の口縁部である。口縁部はやや水平に伸び、頸部は逆Ｌ字状に屈曲する。外面胴部にハケメ、内面胴部に指押さえを施している。

ＳＫ－４（第４図、図版２）

ＳＫ－４は調査区中央付近で検出した、径 80cm の円形の土坑である。検出面から底面までの深さは 15cm と浅い。

弥生土器小片の出土があったが、図化するに至らなかった。

ＳＫ－５（第４図、図版２）

ＳＫ－５は調査区南端部にて検出した。ＳＫ－４に切られる。土層観察では自然堆積の様相を示していたが、掘り込みの形状から土坑としたものである。隣接するＳＫ－３と同遺構の可能性が高

い。検出面から底面までの深さは14cm ～ 55cmとばらつきがあり、南に向けて傾斜する。南には同じく調査を行った２Ｂ区があり、そこで検出されたＳＤ－１と接続する可能性はあるが、詳細は不明である。

遺物の出土はない。

（２）井戸 【ＳＥ】

ＳＥ－１（第５図、図版２）

ＳＥ－１は、調査区北部にて検出した素掘りの井戸である。平面形は円形で、径1.45 m～1.55 mを測り、深さは1.09 mの円筒形を呈する。包水層である硬砂層まで掘削されている。中層～下層には遺物が集中して出土する箇所が複数みられ、完形のものも出土していることから祭祀行為によるものと考えられる。

出土遺物

土器（第７図、図版８）

弥生土器が４点出土している。４は口径18.0 cmの甕である。口縁端部は隅丸方形を呈する。内面はほぼ全面にススが付着している。５～７は袋状口縁壺であり、５は最下層から、７は中層から出土している。口縁部は屈曲部分に緩い稜線をもっており、胴部の張りは５が緩く、６・７は強い。３点ともに内面胴部にススが付着し、丹が看守されるが、その様相は個々で異なる。５は非常に残りが悪く、外面において丹が散在してみられる。６は外面全面に丹を塗り、内面は口縁部分にのみ丹が垂れている。７は外面全面に丹を塗り、内面は広範囲にわたって口縁部から胴部にかけて丹が流れおちている。また、７は胴部に破裂痕がみられる。形態的特徴より、弥生時代中期後半～末の須玖Ⅱ式段階のものと考えられる。

ＳＥ－２（第５図、図版２・３）

ＳＥ－２は、調査区北部にて検出した素掘りの井戸である。径1.39 m～1.22 mの円形を呈し、深さは1.26 mを測る。ＳＥ－１と同じく包水層である硬砂層まで掘削されている。覆土は、１層～３層が「井戸封じ」のための埋土と考えられる。下層にあたる７層以下からは、木器が大量に検出された。また木器の直下からはツル状の繊維を用いた編組品も検出した。

出土遺物

土器（第７図）

弥生土器が３点出土している。８は口径19.0cmの甕である。口縁端部は丸味を帯び、頸部の屈曲はやや強く、くの字状を呈している。９は底径9.0cmの壺の底部であり、やや凸レンズ状を呈している。10は口径16.8cmの鉢である。口縁部は隅丸方形を呈し、外面胴部には黒斑がみられる。

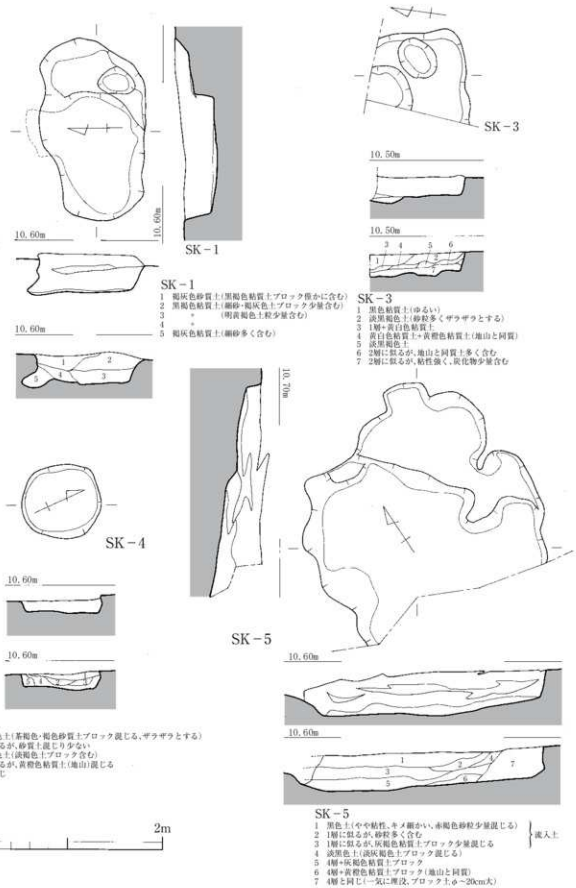
木器（第８図、図版８）

木器については作図の上、番号を付し極力取り上げた。取り上げ数は16点であり、そのうち代表的な３点のみ実測を行った。

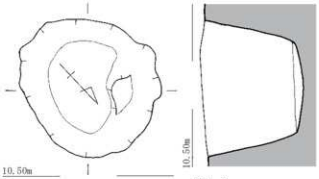
１・２は杭である。１は、先端部分を幅2.5cmほどの加工面で調整しており、杭先を平たく削っている。２は、先端が欠損しているためどのような形態をしていたかは不明である。両端の欠損部付近では、幅3.0cmほどの加工面がみられる。一部焼き焦げがみられることから、焼きしめを行ったと考えられる。３は、蹴放しである。ホゾには抉りがみられる。平坦面ではホゾの角を中心に34cm × 7.5cmの幅で一段調整をしたためか低くなっている。また、片面には無数の細い傷が入っているが、加工傷かどうかは不明である。

編組品（第９図、図版８）

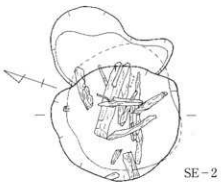
編組品が１点出土している。5cm × 7.5cmと破片であるが、カゴ状を成すものと思われ、体部下半から底部にかけて残存する。底部は２本１単位の２本超２本潜１本送の「網代」組みで、体部下半は２本超２本潜１本送を基調とする「飛びござ目」組みの技法がみられる。



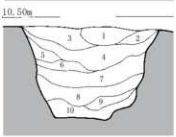
第４図　２Ａ区ＳＫ－１・３～５実測図（Ｓ＝１／40）



SE－1

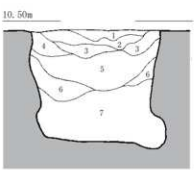


SE－2



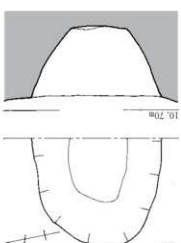
SE－1

1　黄褐色土(砂質､暗褐色土粒多く混じる)
2　黒褐色土(黄褐色土粒少量混じる)
3　黒褐色土(炭化物微かに含む)
4　黒褐色粘質土(土器片含む)
5　　(黄褐色土ブロック少量混じる)
6　黒褐色粘質土
7　黒色粘質土
8　7層に似るが､より粘性高い
9　7層に似るが､砂粒多く含む
10　黒褐色粘質土(黄灰色細砂混じる)

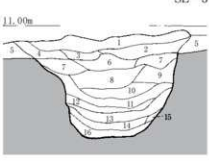


SE－2

1　淡灰褐色土(やや粘性あり､砂粒を含みザラザラとする)
2　黄橙色砂質土(灰褐色粘質土ブロック混じる)
3　2層+黒色粘質土(粘性強い)
4　淡黒褐色土(粘性強い)
5　4層+黒色･黄橙色粘質土(粘性あるが､ゆるい)
6　黄橙色粘質土+淡灰褐色粘質土ブロック(ゆるい)
7　黒色粘質土(ゆるい､黄橙色粘質土ブロック混じる､木片多量に含む)

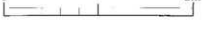


SE－3

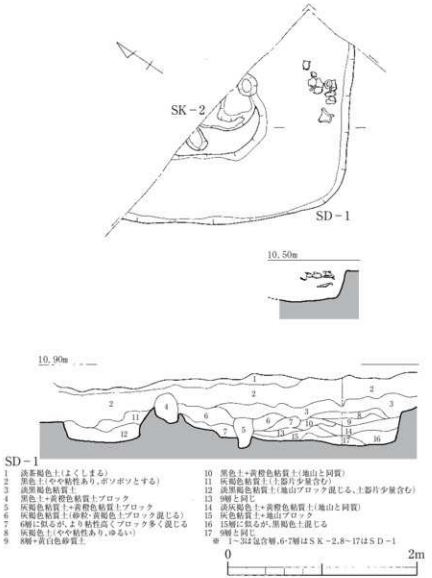


SE－3

1　淡茶褐色土(しまりあり)
2　黒褐色土(粒子細かく､ゆるい)
3　2層+茶褐色土
4　3層と似るが､ややしまりあり
5　2層+茶褐色･赤褐色土ブロック
6　黒色粘質土(ゆるい､砂粒多く含む)
7　6層+茶褐色土(地山と同質)
8　6層に似るが､淡茶褐色土混じる
9　黒色粘質土+赤褐色土ブロック
10　8層+黄茶褐色土ブロック
11　9層に似るが､茶褐色土(地山と同質)多く含む
12　10層と同じ
13　淡灰黒色粘質土(茶褐色粘質土ブロック混じる)
14　11層+黄白色粘質土ブロック
15　黒色粘質土+茶褐色土(地山と同質)
16　15層に似るが､砂粒多く混じる



第５図　２Ａ区ＳＥ－１～３実測図（Ｓ＝１／40）



第６図　２Ａ区ＳＫ－２・ＳＤ－１実測図　（Ｓ＝１／40）

ＳＥ－３（第５図、図版３）

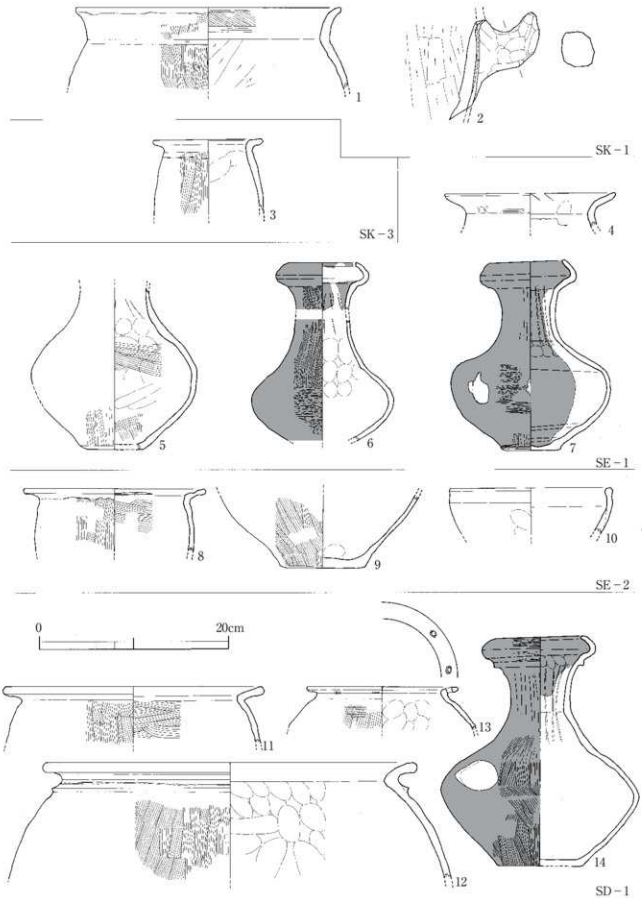
ＳＥ－３は、調査区南東壁に掛かるように検出した。現況上端 1.10 m× 1.37 mを測り、東西に長い楕円形を呈するものであろう。深さは 78cm を測る。硬砂層までは掘り込まれてはいないが井戸と考えられ、雨水を利用していたものと推測される。

遺物の出土はない。

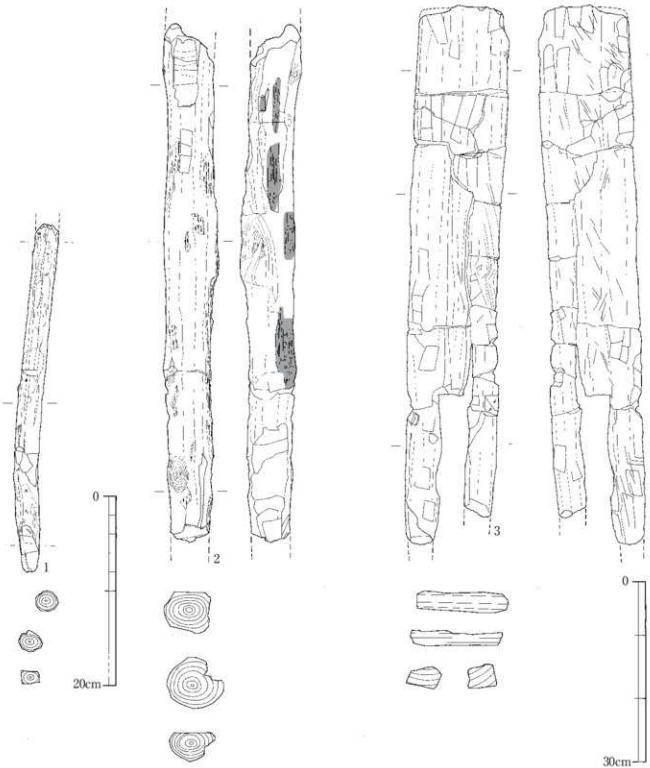
（３）溝　【ＳＤ】

ＳＤ－１（第６図、図版３）

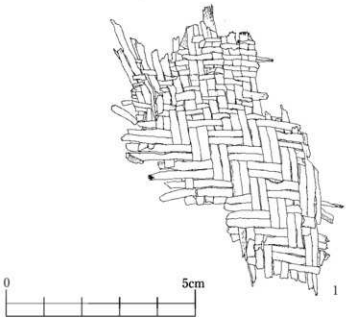
ＳＤ－１は調査区北部壁に掛かるように検出した。調査区壁面に掛かるためプランは不明だが、調査区内において屈曲しており、隅丸方形を呈するものと思われる。周溝状遺構の可能性もあろう。幅 0.7 m～ 1.0 m、深さは 30cm ～ 33cm を測る。



第７図　２Ａ区ＳＫ－１・３、ＳＥ－１・２、ＳＤ－１出土土器実測図（Ｓ＝１／４）



第８図　２Ａ区ＳＥ－２出土木製品実測図（１：Ｓ＝１／４、２・３：Ｓ＝１／６）



第９図　２Ａ区ＳＥ－２出土編組品実測図（Ｓ＝１／１）

出土遺物

土器（第７図、図版８）

弥生土器が４点出土している。11・12は甕である。双方ともに口縁端部は隅丸方形を呈する。11は直線的に口縁部が伸び、12はやや外反気味に口縁部をつまみ出しているが、頸部はくの字を呈する。12は頸部直下に１条の断面三角形突帯が貼り付けられている。13は無形壺である。口縁端部は丸味を帯び、２個１対の穿孔が１組残存している。頸部はくの字に屈曲している。14はほぼ完形に復元できる袋状口縁壺である。この壺はＳＥ－１の下層出土の破片と接合している。口縁部は屈曲部分に緩い稜線をもち、口縁部直下には１条の断面三角形突帯が貼り付けられている。胴部の張りが強い。外面には全面に丹を塗り、内面は口縁部から頸部にかけて丹が流れおちている。また、外面には破裂痕がみられる。形態的特徴より、弥生時代中期後半～末の須玖Ⅱ式段階のものと考えられる。

第４章　大崎後原遺跡２Ｂ区の調査

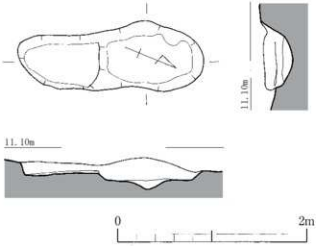
１　調査の概要

調査地は、２Ａ区の南側にあたる。標高 11.2 m前後、遺構検出面で 10.9 m～ 11.0 mを測り、緩やかに西に向けて傾斜する。

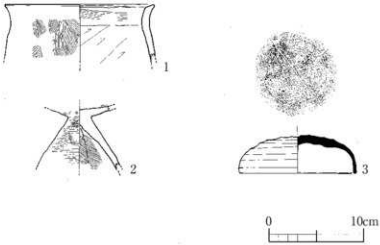
遺構検出面は２Ａ区と同様の、淡茶褐色ローム層である。基本層序は造成土、黒褐色土、黒色シルトの包含層、その下で淡茶褐色ロームの地山面となる。さらに下は黄褐色土・淡黄白色の砂へと変わっていく。

検出した遺構は、土坑１基、溝１条である。

２　遺構と遺物



第 10 図　２Ｂ区ＳＫ－１実測図（Ｓ＝１／40）



第 11 図　２Ｂ区ＳＤ－１出土土器実測図（Ｓ＝１／４）

（１）土坑　【ＳＫ】

ＳＫ－１（第 10 図、図版４）

ＳＫ－１は、調査区北部にて検出したＳＤ－１を切る土坑である。1.9 m × 0.6 mの南北に長い楕円形を呈する。検出面から底面までの深さは、13cm ～ 20cm を測る。

遺物の出土はない。

（２）溝　【ＳＤ】

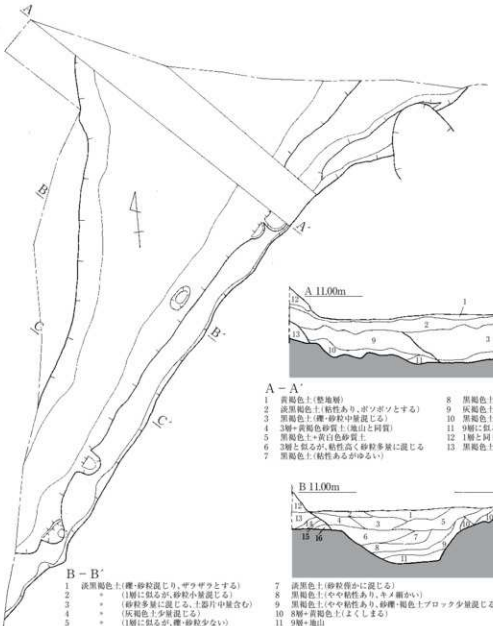
ＳＤ－１（第 12 図、図版４）

ＳＤ－１は、調査区西壁沿いを南北に縦断する溝である。ＳＫ－１に切られる。検出長 7.35 m、深さは 57cm ～ 63cm を測る。幅は南側で 1.05 m、北側で 4.05 mと北に向けて広がる。土層観察によって掘り直されている様子が窺えた。本来は西寄りの溝であったものをやや東に振るように掘削し直したものと思われる。

出土遺物

土器（第 11 図、図版９）

土師器２点と須恵器１点が出土している。１は土師器の甕である。口縁端部上面には端面が形成されている。頸部の屈曲は緩く、口縁部から胴部にかけて緩やかなカーブを描いている。２は土師器の器台である。受部下半から脚部にかけて残存する。内面脚部は、絞り痕の単位に合わせてハケメを施す方向にアクセントをつけている。３は須恵器の坏蓋である。外面に施されるヘラ削りは、連続して頂部まで調整を施している。外面にはヘラ記号が付されている。およそ７Ｃ初頭～前半に相当すると考えられる。



第 12 図　２Ｂ区ＳＤ－１実測図（Ｓ＝１／40）

第５章　大崎後原遺跡２Ｃ区の調査

１　調査の概要

調査地は、２Ａ区の東にあたる。標高 11.2 m前後、遺構検出面で 10.4 m～ 10.5 mを測る。

遺構検出面は２Ａ区・２Ｂ区と同様で、淡茶褐色ローム層である。基本層序は造成土、黒褐色土、黒色シルトの包含層、その下で淡茶褐色ロームの地山面となる。さらに下は黄褐色土・淡黄白色の砂へと変わっていく。

検出した遺構は、掘立柱建物跡１棟、土坑１基、溝１条、ピット多数である。

２　遺構と遺物

（１）掘立柱建物跡　【ＳＢ】

ＳＢ－１（第 13 図、図版５・６）

ＳＢ－１は、調査区南部で検出した２間×２間の総柱建物である。検出した柱穴は７基で、芯心間の距離は北辺で 3.2 m、東辺で 3.05 mである。主軸はＮ－ 18°－Ｓである。柱掘方は隅丸方形から円形で、径 59㎝ ～ 79㎝、深さは 30㎝ ～ 61㎝ を測る。柱痕は、Ｐ－４で確認され、柱抜取り痕はＰ－１・５・６・７で確認できる。

遺物は各柱穴より出土しているが、いずれも小片のため図化するに至らなかった。

（２）土坑　【ＳＫ】

ＳＫ－１（第 14 図、図版６）

ＳＫ－１は、調査区北西壁際にて検出した、ＳＤ－１を切る土坑である。1.28 m× 0.96 mの不整円形を呈し、検出面から底面までの深さは 20㎝ 程度である。底面は平坦である。

遺物は白磁椀・小坏の破片の出土があったが、いずれも小片のため図化するに至らなかった。近世期の所産であろう。

ＳＫ－２（第 14 図、図版６）

ＳＫ－２は、調査区南部にて検出された土坑である。ＳＢ－１のＰ－２・５に切られる。径 1.2 m程の楕円形を呈するものである。検出面から底面までの深さは最大で 22㎝ を測る。

遺物の出土はない。

（３）井戸　【ＳＥ】

ＳＥ－１（第 15 図、図版６）

ＳＥ－１は、調査区南壁に掛かるように検出された。ピットに切られるため詳細は不明であるが、径 1.2 m程の円形を呈するものと思われる。埋土は、２・３層は人為的な埋土である。検出面から底面までの深さは約１ｍと浅く、また包水層である硬砂層までは達していないため、雨水などの溜り水を利用する井戸と考えられよう。

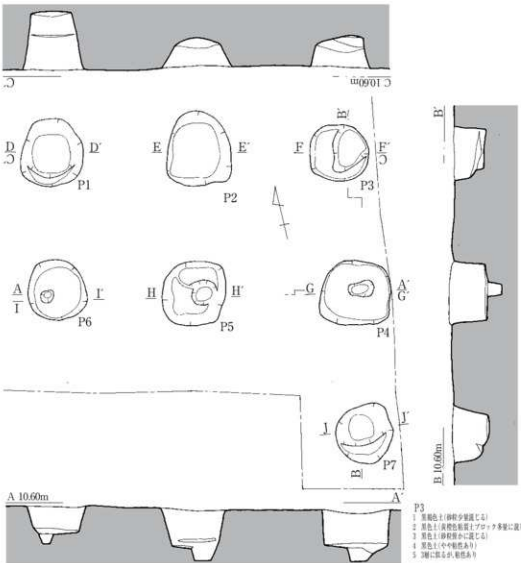
遺物の出土はあったが、小片のため図化するに至らなかった。また、小片のため器種等は不明である。

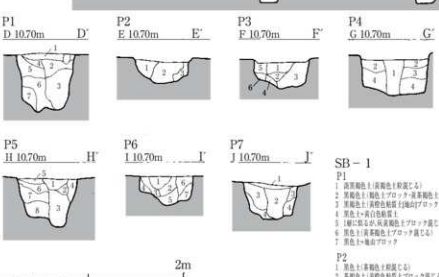
（４）溝　【ＳＤ】

ＳＤ－１（第 16 図、図版７）

ＳＤ－１は、調査区を東壁から西壁にかけて屈曲しながら横断するように検出した溝である。現状で全長 9.6 mを測る。

遺構は、調査区北東コーナーから南西方向に約 4.6 m延びたところで北西方向に屈曲する。屈曲した後、北西方向に約 5.0 m延び調査区西壁に至る。幅は西端で 2.1 m、東端で 1.5 m、屈曲部





SB－1

P1
1 淡黒褐色土(黒褐色土較薄にる)
2 黒褐色土(褐色土ブロック・炭・茶褐色土較薄にる)
3 黒褐色土(茶褐色粘質土(褐色)ブロック薄にる)
4 黒色土+黄白色粘質土
5 1層に似るが,灰黒褐色土ブロック薄にる
6 黒色土(黒茶褐色土ブロック薄にる)
7 黒色土+褐色ブロック

P2
1 黒色土(茶褐色土較薄にる)
2 茶褐色土(褐色粘質土ブロック薄にる)
3 黒色粘質土+褐色ブロック

P3
1 黒褐色土(褐色少量薄にる)
2 黒色土(黒褐色粘質土ブロック多量に薄にる)
3 黒色土(褐色粒かに薄にる)
4 黒色土(やや粘色あり)
5 1層に似るが,粘色あり

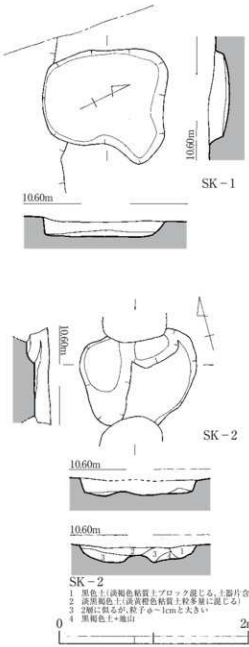
P4
1 灰黒褐色土(黒褐色土ブロック少量,灰色土ブロック多量に薄にる)
2 黒褐色土(灰色土ブロック少量薄にる)
3 黒褐色土(黒褐色土ブロック多量に薄にる)
4 黒色土(黒褐色土ブロック少量薄にる)

P5
1 暗褐色土(ゆるい,黒褐色土粒少量薄にる)
2 黒褐色土(黒褐色土ブロック少量薄にる)
3 黒色土(ややしまりあり,黒褐色土粒少量薄にる)
4 黒色土(黒褐色土較薄にる)
5 黒褐色土(黒褐色土粒多量に薄にる)
6 褐灰色土(黒褐色土粒多量に薄にる)
7 暗褐色土(黒褐色・褐色土粒薄にる)
8 黒褐色土(褐色土較薄にる)

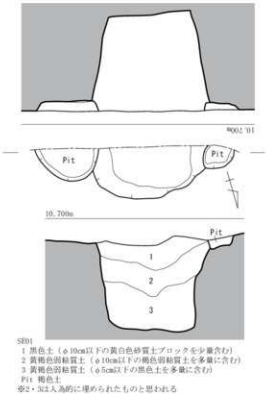
P6
1 黒褐色土(褐粒かずかに薄にる)
2 1層+黒褐色粘質土(褐色)ブロック
3 1層に似るが,灰黒褐色土薄にる
4 2層と同じ
5 茶褐色土ブロック+褐色
6 黒色土(粘色あり,黒褐色土較薄にる)
7 5層と同じ

P7
1 淡黒褐色土(褐色ブロック粒かに薄にる)
2 淡黒色土(黒色・黒褐色土ブロック薄にる)
3 淡黒褐色土(褐色ブロック大量に薄にる)
4 1層+茶褐色粘質土

第13図　２Ｃ区ＳＢ－１実測図（Ｓ＝１／40）



第 14 図　２Ｃ区ＳＫ－１・２実測図（Ｓ＝１／40）



第 15 図　２Ｃ区ＳＥ－１実測図（Ｓ＝１／40）

では2.1ｍを測る。検出面から底面までの深さは56cm ～ 80cm、断面形状はＵ字型に近い逆台形を呈している。埋土は基本的にはレンズ状堆積で、人為的埋め戻しは見られない。

遺物は、上層～下層に至るまで大量に出土しており、遺構検出面直上において散見されたまとまりと、遺構の中・下層よりまとまって出土したものとに区分できる。遺物の出土は、特に屈曲部より西側の北壁沿いに集中している。器種は、甕・壺・蓋・高杯・器台・鉢・手捏ね土器・支脚とバリエーションに富む。埋土の堆積に合わせるように南に向けて傾斜して検出されたことから、北側から投棄されたものと考えられる。

出土遺物

土器（第 17 ～ 22 図、図版９～ 11）

上層（第 17・18 図、図版９）

遺構検出面直上より出土したものは、第 17 図と第 18 図である。

第 17 図１～９は、土師器の甕である。口縁端部は、上方に拡張する跳ね上げ口縁のもの（１・２・４）、隅丸方形のもの（３・７・９）、丸くおさめるもの（８）の３種類がみられる。頸部は、全てくの字を呈するが、４・７は屈曲が緩い。底部は口径の小さな平底を呈する。器壁は薄く、５・６・９の外面ではタタキ調整が施される。１・２の内面ではヘラ削りが施されるものの、総じて内外面ともにハケメ調整を主体的に施している。５は、底部付近において焼成後に内側からあけたと想定される穿孔が１箇所みられる。

第 18 図１・２は頸部と胴部の境に明瞭な稜線をもつ広口壺である。１は口縁部をやや上方につまむ。２は口縁端部内面において、本来貼り付けていた粘土紐が剥離した痕跡がみられる。第 18

図３～５は高杯である。３は脚部から裾部に向かって緩やかに広がる。４・５は短い柱状部に低くて大きく開く裾部を呈し、特に４は脚部上半が中実である。杯部は５のみ残存しており、杯部が途中で屈曲し上方へと伸びる。裾部の穿孔は、４で２個、５で３個みられる。第 18 図６・７は器台である。双方ともに皿状受部に直線的に広がる脚部をもつ。７は受部がやや浅く、６は脚部に３個の穿孔がみられる。第 18 図８は鉢である。底部には焼成前にあけたとみられる穿孔がある。第 18 図９・10 は坏である。10 は外面にヘラ記号とみられる線が刻まれている。第 18 図 11 は内外面ともにヘラ削りを施した細長い筒状を呈しており、製塩土器と想定される。第 18 図 12 は支脚である。被熱のためか、非常にもろい。

上記より、上層より出土した土器は、第 18 図９・10 など一部において古墳時代後期の様相を呈するものがみられるものの、総じて古墳時代初頭～前期を中心とした一群と考えられる。

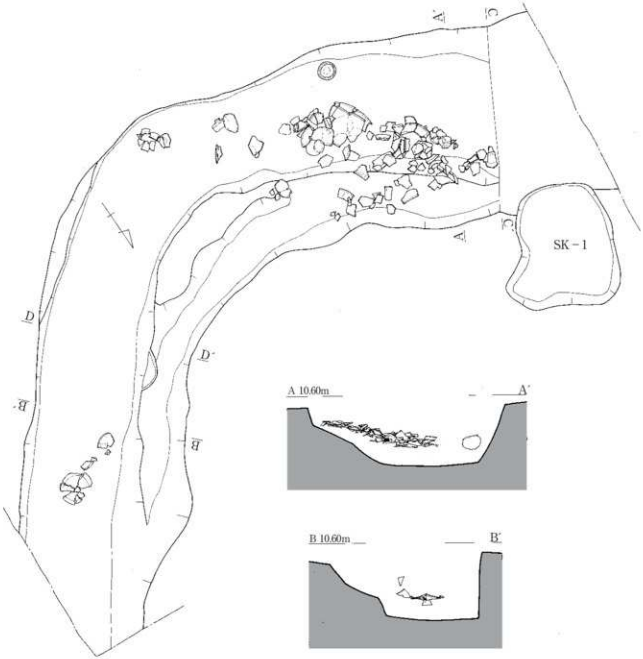
中・下層（第 19 ～ 22 図、図版 10・11）

遺構の中・下層よりまとまって出土したものは、第 19 ～ 22 図である。

第 19 図１～８、第 20 図１～６は甕である。第 19 図１は、口縁部が水平方向に伸び、口縁端部が下方に肥厚する逆L字状を呈する甕である。第 19 図２～８、第 20 図１～３は、稜線の緩いくの字甕である。口縁端部は、丸みを呈するもの（第 19 図６～８）、肥厚するもの（第 19 図２・３、第 20 図３）、隅丸方形を呈するもの（第 19 図４・５、第 20 図１・２）の３種類がみられる。このうち、第 19 図３では、口縁部内面に刻目がみられる。同様の刻目を口縁部内面に施した甕は、大崎中ノ前遺跡２の住居より出土している（市報告 123 集）。第 19 図３と刻目の形状は異なり直線的な刻目を口縁部内面に施した甕は、大崎中ノ前遺跡１・２の住居や溝から出土した日常的な甕（市報告 116 集・123 集）だけでなく、干潟遺跡５でみられるように甕棺においても施されている（市報告 116 集）。こうしたタイプの刻目を施す甕は、当該期に相当する小郡市域の各遺跡において数点の出土を確認することができる。また、第 19 図５では、胴部に方形突帯が１条施されている。第 19 図6では、口縁部内面に刻目か穿孔を意識したと考えられる窪みが1箇所みられる。第 19 図７では、頸部に穿孔が１個残存しているが、本来は対角線上にもう１箇所穿孔があけられていたと想定される。第 20 図４は内外面全面に丹が塗られた精製土器である。口縁端部は内側に短く突出し外側へやや長く伸びる鋤先口縁を呈し、口縁部直下の外面にはM字突帯がみられる。口縁端部内面では、直線の暗文が施されている。第 20 図５・６は平底の底部である。５は、底部内面に放射状の工具痕がみられる。

第 21 図１～10 は壺である。１は広口壺である。口縁部は内側に短く突出し、外側へやや長く伸びる鋤先口縁である。頸部と胴部の境の稜は明瞭であり、外側に断面三角形突帯を１条施している。２・３は甑形土器であり、外面は全面に丹が塗られている。双方ともに頸部と胴部の境に断面三角形突帯を１条施すものの、胴部に施している突帯に差異がみられる。２は上側に方形突帯１条、下側にM字突帯１条を施すが、３は断面三角形突帯１条を施す。４は広口壺か袋状口縁壺の胴部である。また、５・６は細別器種が不明なものの壺の底部であり、総じて平底を呈する。７～９は無頸壺である。くの字口縁に球形状の胴部を呈し、底部は胴部との境において凸レンズ状を呈する７・９と、凹レンズ状を呈する８がみられるものの、総じて平底である。口縁部には穿孔があけられており、７は１個、８は２個１対が対角線上に２組、９は２個１対が１組みられる。７・９は残存部分が限られているものの、８同様に本来は対角線上に同様な穿孔があけられていたと想定される。８・９では丹が外面全面に塗られており、内面の口縁部から胴部にかけては丹が垂れた様子が看取される。９は底部中央において焼成後に外側から内側に向けてあけたと想定される穿孔が１箇所みられる。10 は台付壺とみられる。口頸部に方形突帯を１条施し、口縁部内面から外面において丹が塗られている。

第 21 図 11・12 は低平で厚味の一様な蓋であり、双方とも外面全面に丹が塗られている。双方ともに２個１対の穿孔があけられているが、本来は対角線上に同様の２個１対の穿孔があけられていたと



SD－1

C－C'

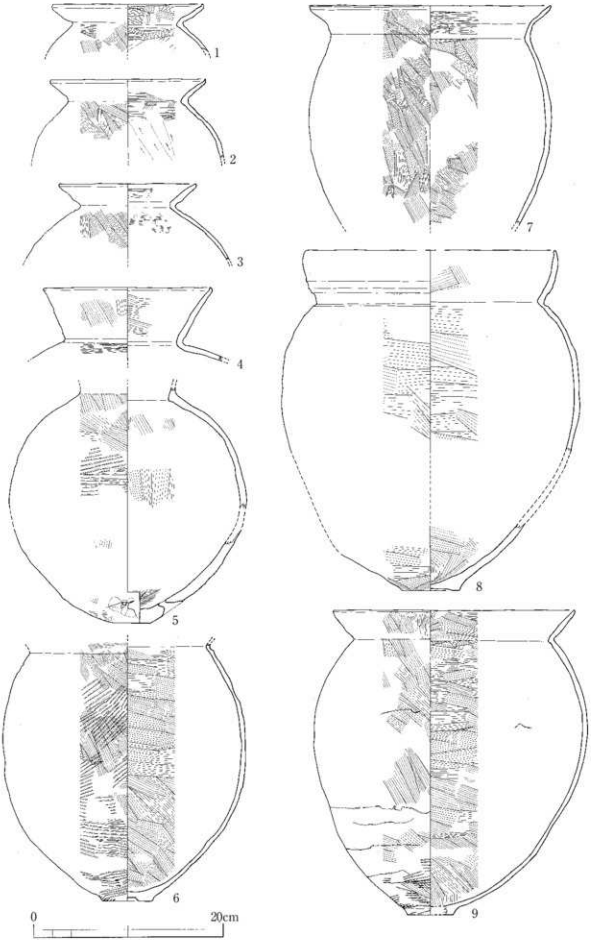
1　黒褐色土(ややしまりあり、土器片多量に含む)※包含層
2　黒褐色土(黄褐色土粒僅かに混じる)
3　褐色土(黄褐色土ブロック混じる)
4　褐色土(黄褐色・灰色土粒少量混じる)
5　黒褐色土(黄褐色・灰色土少量混じる)
6　褐色土(黄褐色・灰色土少量混じる)
7　黒色土(黄褐色土少量混じる、土器片多量に含む)
8　黒褐色土(明黄褐色土多量に混じる)
9　褐色粘質土(黄褐色土粒少量混じる)
10　褐灰色粘質土(ゆるい、黄褐色土ブロック多量に混じる)
11　黄灰色粘質土(粘性あり、灰白色シルト(地山)多量に混じる)

0　2m

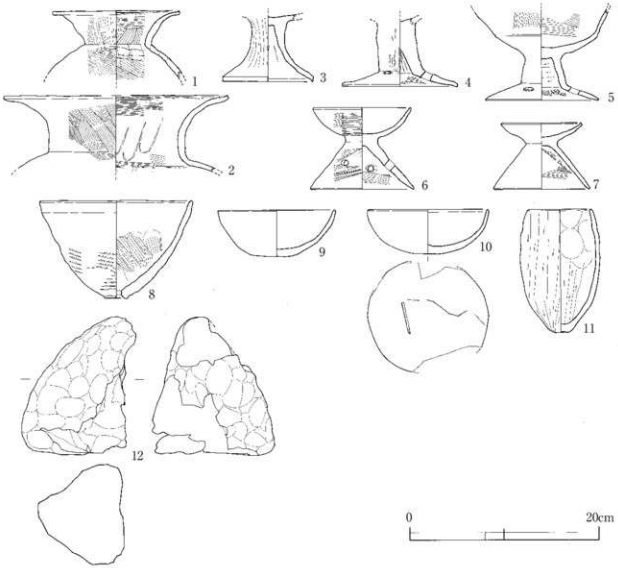
D－D'

1　黒褐色土(ややしまりあり、土器片多量に含む)※包含層
2　淡黄褐色土(黄橙色粘質土ブロック僅かに混じる)
3　2層に似るが、ブロック多量に混じる(80%)
4　黒色粘質土(灰白色粘質土粒混じる、土器片含む)
5　黒色土(橙色土粒僅かに混じる)
6　5層+淡黄褐色粘質土(地山と同質)
7　6層と同じ
8　黒色粘質土(ゆるい、橙色土ブロック混じる、土器片少量含む)
9　黒色粘質土(ゆるい)
10　黄灰白色シルト+灰褐色粘質土(粘性強い、土器片含む)

第16図　２Ｃ区ＳＤ－１実測図（Ｓ＝１／40）



第17図　２Ｃ区ＳＤ－１上層出土土器実測図①（Ｓ＝１／４）



第18図　２Ｃ区ＳＤ－１上層出土土器実測図②（Ｓ＝１／４）

想定される。出土状況より、11は第21図８の無頸壺とセットで使用されていたと想定される。

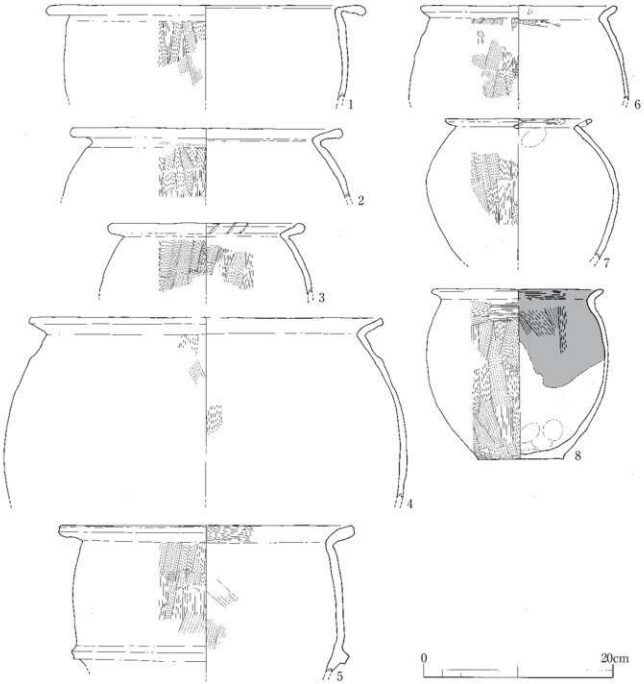
第22図１～４は高杯である。１～３の口縁部は内側に短く突出し外側に長く伸びる鋤先口縁であるのに対し、４の口縁部は外側にやや長く伸びるのみの鋤先口縁であることから、１～３より新相と考えられる。また、２・３は杯部内面において多角形にヘラミガキを施している。１～３は外面全面と内面杯部に丹が塗られている。特に、２・３は口縁部内面に暗文が施されており、２は直線、３は格子文風であり、どちらも無作為に引いた斜線である。

第22図５～７は鉢である。口縁部は、５が素口縁に断面三角形突帯を内側に向けて貼り付けたもの、６が素口縁、７がくの字口縁と多様である。しかし、総じて胴部は半球形の丸みをもち、底部は平底である。

第22図８・９は手捏ね土器である。

第22図10～12は器壁の厚い支脚である。10・11は中空であり、10は筒状を、11は脚裾がやや広がる筒状を呈する。12は裾部の破片であるため上部構造は不明であるが、形態的特徴より、裾部が最も広がり中空が途中でなくなる三角錐型の支脚と想定される。

上記より、中・下層より出土した土器は、第22図８～12など一部において古墳時代初頭～前期

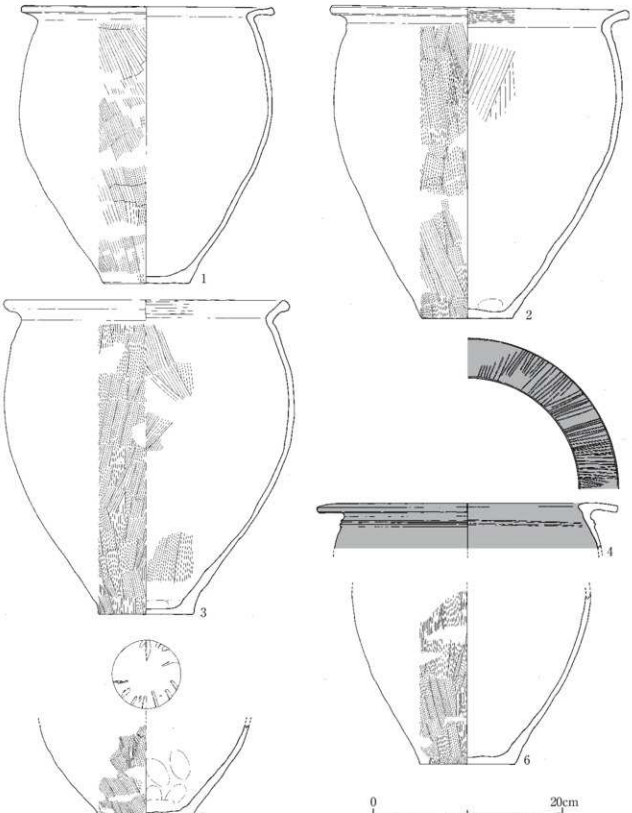


第19図　２Ｃ区ＳＤ－１中・下層出土土器実測図①（Ｓ＝１／４）

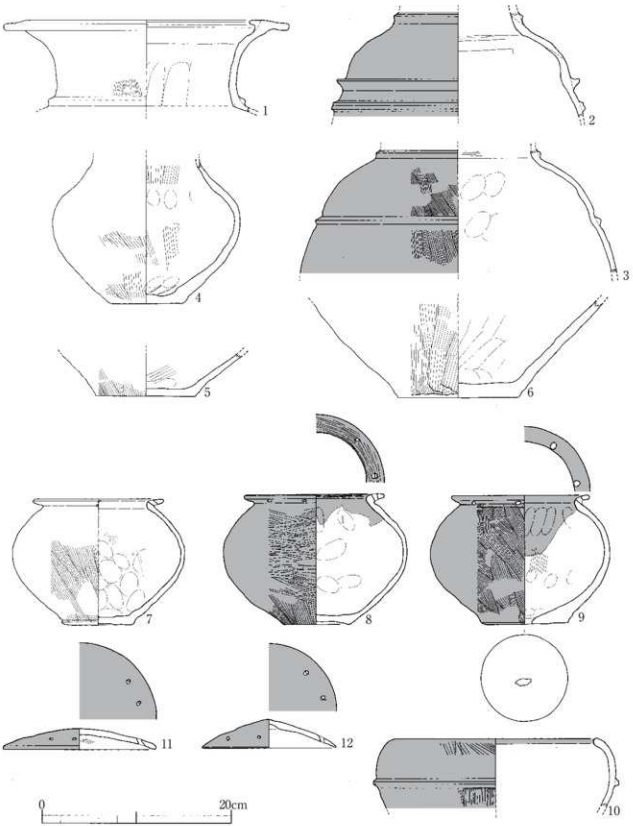
の様相を呈するものがみられるものの、総じて弥生時代中期後半～末（須玖Ⅱ式段階）を中心とした一群と考えられる。

石器（第23図、図版11）

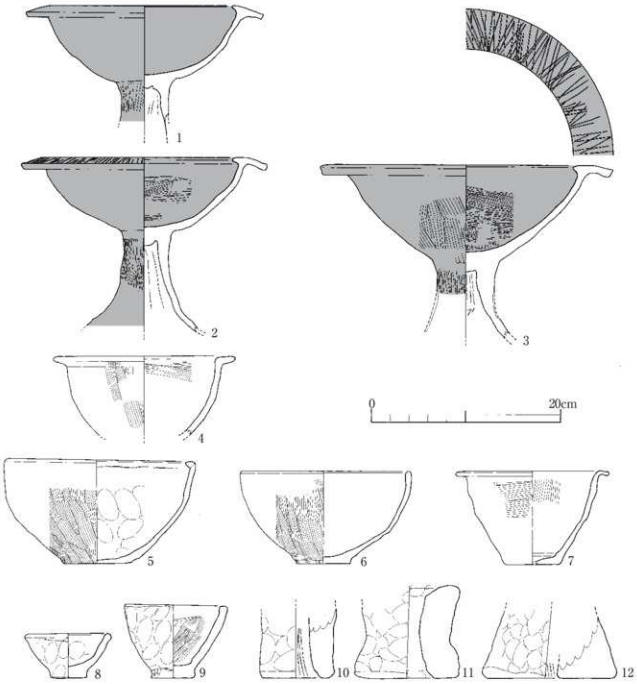
1は粘板岩製石庖丁である。約1／3を欠損しており、現状で長さ7.9㎝、幅3.9㎝、厚さ0.65㎝を測る。穿孔は2箇所認められ、うち残存状況の良い1つは孔径9㎜を測る。2は粘板岩製砥石である。先端部分が両側とも欠損しているが、長さ13.5㎝、幅6.8㎝、厚さ4.8㎝を測り、上面・下面・側面の4面を砥石として利用している。3は頁岩製砥石である。一部側面の角が欠損しているが、長さ13.2㎝、幅11.1㎝、厚さ6.1㎝を測り、本来は三角錐状を呈していたと考えられる。上面・側面の2面を砥石として利用している。



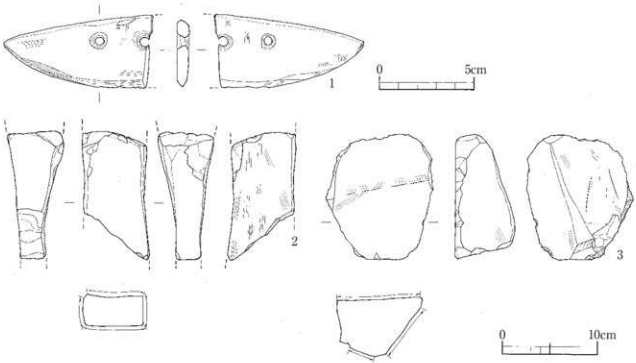
第20図　２Ｃ区ＳＤ－１中・下層出土土器実測図②（Ｓ＝１／４）



第21図　２Ｃ区ＳＤ－１中・下層出土土器実測図③（Ｓ＝１／４）



第22図　２Ｃ区ＳＤ－１中・下層出土土器実測図④（Ｓ＝１／４）



第23図　２Ｃ区ＳＤ－１出土石器実測図（１：Ｓ＝１／２、２・３：Ｓ＝１／４）

第６章　まとめ

１　各遺構の時期と大崎後原遺跡の広がりについて

２次にわたる大崎後原遺跡の調査では、弥生時代中期及び古墳時代を中心とした遺構が確認されている。調査区が矮小であり遺構密度も低いことから詳細は不明であるが、現在時期が確定できる弥生時代中期の遺構を基に、大崎後原遺跡の広がりについてまとめたい。

これまでの調査において、弥生時代中期に相当する遺構は、以下のとおりである。

１次調査・・・Ｄ－１　　２次調査・・・２Ａ区ＳＥ－１・ＳＤ－１、２Ｃ区ＳＤ－１

１次調査で検出した溝が弥生時代中期中頃と古く、２次調査で検出した溝・井戸は弥生時代中期後半～末頃である。

溝は人為的な埋め戻しが見られず、１次調査のＤ－１でのみ地形にそった南側への傾斜が確認されている。２次調査２Ｃ区ＳＤ－１は、常に水が湧き出し、北側から大量の土器が投棄されている。これらの土器の中には、丹塗り土器がみられることから、祭祀として投棄された可能性が考えられる。弥生時代中期後半～末頃より、溝に土器を大量に投棄する水に関連する祀りが指摘されており（石田 2009）、２Ｃ区ＳＤ－１もこうした水に関連する祀りの可能性が考えられる。

２次調査２Ａ区ＳＥ－１からは、袋状口縁壺が３点出土している。最下層から破片が１点、中層より完形のものが１点、埋土中より完形に近いものが１点それぞれ出土している。弥生時代中期末～後期初頭の井戸祭祀では、丹塗土器の袋状口縁壺が集中して出土する場合があることが指摘されている（久住・久住 2008）。２Ａ区ＳＥ－１の場合、湧水点が不明であり、出土状況も個体によってばらつきがあることから、井戸祭祀として投棄されたとは断定できず、使用中に廃棄した可能性も想定すべきであろう。

大崎後原遺跡は、住居などの遺構が検出されておらず、遺構密度も低い。しかし、地形的に南側に傾斜していることから、当該時期の集落は、調査区より北側に広がっていたものと考えられる。

２　小郡市中・南部における弥生時代中期の遺跡動向

1．小郡中尾遺跡２、２．小郡若山遺跡１・３・６、３．小郡遺跡７区、
４．小郡遺跡、５．大板井遺跡Ⅰ、６．大板井遺跡Ⅱ、７．大板井遺跡Ⅲ、
８．大板井遺跡Ⅷ、９．大板井遺跡19、10．大板井遺跡22、
11．大板井遺跡ⅩⅡ、12．小板井屋敷遺跡、13．大崎小園遺跡、
14．大崎遺跡、15．大崎中ノ前遺跡１・２、16．大崎後原遺跡１・２、
17．寺福童遺跡５、18．小郡正尻遺跡２・３・４

第 24 図　小郡市中・南部の弥生時代中期の遺跡分布

１）はじめに

大崎後原遺跡２では、小郡市域において集落域からまとまった出土例の少ない弥生時代中期後半～末頃の土器が大量に出土した。大崎後原遺跡から北側に約２㎞の所には、弥生時代中期の拠点集落と考えられている小郡・大板井遺跡群が所在する。大崎後原遺跡の性格を考察するうえでも、小郡・大板井遺跡群といった拠点集落との関係を考える必要がある。その際、地形的な選択性についても着目することとする。

弥生時代中期は、道具の技術の進歩や人口の増大により三国丘陵から広い平坦地への人の移動が想定されている（西谷 1996）。丘陵ほど水の利便性が必要でなくなったとしても、大きな河川に近い低位段丘上な

どを好んで選んだ可能性が考えられる。よって、本稿では、大崎後原遺跡の性格を位置づけるためにも、弥生時代中期段階における小郡市域中南部の遺跡の広がりについて、地形の選択性と比較しながらその動向を まとめたい。なお、時期区分は、小郡市域の弥生時代中期編年である片岡編年（片岡 1985）に概ね依拠することとし、大きく①須玖Ⅰ式段階（弥生時代中期中頃）と②須玖Ⅱ式段階（弥生時代中期後半～末頃）に区分して遺跡の動向を概観することとする。

2）地域設定

対象遺跡は第 24 図に示したとおりである。対象遺跡は、宝満川西岸の脊振山地からなだらかにのびる低位段丘上に位置している。この低位段丘には小規模な谷が入り組んでおり、沖積平野に突き出した低位段丘や独立した低位段丘等がある。小郡市域においてこうした地形は、谷水田として利用されてきた。当時も、谷水田等水の利用がしやすかったのか、この低位段丘上やその周辺には、当該期の遺跡が存在している。この状況は、『大板井遺跡』（九州大学文学部考古学研究室編 1995）で指摘されているような遺跡群とほぼ一致する。『大板井遺跡』の区分を参照し、本稿では脊振山地からなだらかに伸びる低位段丘を以下のような地域で区分する。

A：小郡・大板井遺跡群・・・最北端で南東側に張り出す低位段丘に所在する遺跡。

B：大崎遺跡群・・・南側に張り出す東側の低位段丘とその付近の独立低位段丘に所在する遺跡。

C：寺福童遺跡群・・・南側に張り出す西側から 2 番目の低位段丘に所在する遺跡。

D：小郡正尻遺跡・・・西側に流れる秋光川に沿って広がる遺跡群。

3）須玖Ⅰ式段階の遺跡動向

第 25 図　小郡市中・南部の須玖Ⅰ式段階の遺跡分布
（＊遺跡ドットと番号は図 24 に対応）

小郡市域は、前段階の弥生時代中期初頭まで、北部の三国丘陵を中心として遺跡群の広がりがみられた。それが、弥生時代中期中頃以降、三国丘陵の遺跡数が相対的に減少・縮小し、小郡・大板井遺跡群が所在する小郡市域中部の丘陵や台地、南部の沖積平野の低位段丘へと遺跡が広がっていく。

小郡・大板井遺跡群は、弥生時代前期後半以来集落としての活動を開始しており、須玖Ⅰ式段階の弥生時代中期中頃より、集落域が飛躍的に拡大する。大板井遺跡では、集落を取り囲むように甕棺墓群が作られており、中期段階では低位段丘上だけで生活が完結している。小郡遺跡と大板井遺跡は南から入り込む浅い谷によって隔てられているものの、小郡若山遺跡からは多鈕細文鏡が、大板井遺跡では銅戈を有する遺構が検出されていることから、この地域における中核的な地位がうかがえる。

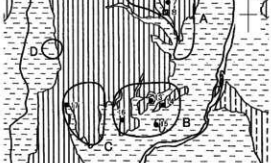
小郡・大板井遺跡群の南側には、時期が若干新相を呈する大崎遺跡群が所在する。大崎遺跡群は、大崎井牟田遺跡で縄文時代の遺構が確認されているものの、弥生時代の遺構は中期段階より確認されている。大崎遺跡では須玖Ⅱ式段階に近い時期の墓域や祭祀土壙、大崎中ノ前遺跡 1 で土壙が数基確認されていることから、大崎中ノ前遺跡で居住していた人々の墓域として大崎遺跡が存在したと考えられる。小郡・大板井遺跡群と比べると比較的に新しい段階のものが多いことから、人口増大や耕作地の拡大を求める動きの中で、小郡・大板井遺跡群で活動していた人々の一部が土地を求め、南側の低位段丘へと活動拠点を拡大した可能性が考えられる。

寺福童遺跡群では、弥生時代以来墓地として継続している。この時期は、寺福童遺跡 5 において甕棺墓を中心とした墓域が形成されている。また、低位段丘の東端に位置する寺福童遺跡 4 からは、

弥生時代中期の埋納遺構が検出されている。

寺福童遺跡群から北へ約 600 mのところに、小郡正尻遺跡が所在する。小郡正尻遺跡は、これまで概観してきた地域の遺跡と比べ、時期が若干古相を呈する。調査範囲が限られているものの、溝を中心に遺構が検出され、住居も１軒確認されていることから、少なくともこの時期に人々の居住がなされていたと考えられる。小郡正尻遺跡の南側約 125 mのところには、弥生時代中期初頭頃の遺構が検出された小郡野口遺跡がある。小郡正尻遺跡の主体は、須玖Ⅰ式古相段階を呈することから、小郡野口遺跡で活動していた人々が生活領域を拡大する中で、小郡正尻遺跡まで活動領域を広げた可能性が考えられる。

4）須玖Ⅱ式段階の遺跡動向



第 26 図　小郡市中・南部の須玖Ⅱ式段階の遺跡分布
（＊遺跡ドットと番号は図 24 に対応）

須玖Ⅱ式段階になると、寺福童遺跡群では引き続き墓域が継続するものの、小郡正尻遺跡において遺構の広がりが確認できなくなる。また、小郡・大板井遺跡群においては、弥生時代中期末から後期初頭にかけてまとまった集落が確認されておらず遺構も以前に比べ希薄になる（片岡 2001）。

一方で、大崎遺跡群では大崎遺跡の墓域が継続するとともに、大崎中ノ前遺跡を中心に集落域が拡大する。大崎中ノ前遺跡では、住居８軒、掘立柱建物６棟、周溝状遺構１条、その他溝や土壙が検出されている。また、大崎中ノ前遺跡２の西側に所在する大崎後原遺跡では、井戸１基と溝２条が確認されている。このことから、当該期の大崎遺跡群においては、これまで概観してきた地域の遺跡とは異なり、須玖Ⅰ式段階から継続する人々の活発な活動が想定できる。

5）まとめ

かなり大まかであるが、小郡市域中・南部の弥生時代中期の遺跡動向を概観した。須玖Ⅱ式段階の大崎遺跡群は、拠点集落である小郡・大板井遺跡群が弥生時代中期末から後期初頭にかけてまとまった集落が確認されていない中で、活発期を迎えている。このことから、土地を求め人々が活動領域を広げる際、宝満川に近く、南側には広大な沖積平野が広がる大崎遺跡群は、立地として好まれ、人々の集落領域として選択された可能性が考えられよう。

当該地域の弥生時代中期編年が確立してから 25 年以上経過している。片岡編年（片岡 1985）の中でも指摘されているように、弥生時代中期末の資料は編年作成当時不足していたが、以後約 25 年間の調査成果により、資料が蓄積されてきている。今後は、大崎後原遺跡２の調査成果を踏まえながら、当該地域の土器編年の再考が求められよう。

＜主要参考文献＞＊五十音順、報告書は割愛

石田智子 2009「北部九州弥生時代中期の土器祭祀」『奴国の南―九大筑紫地区の埋蔵文化財―』九州大学総合博物館

片岡宏二 1985「弥生時代中期の土器編年について―特に三国丘陵の資料を中心に―」『大板井遺跡Ⅱ』小郡市教育委員会

片岡宏二 1996「第三章第二節四 農耕村落の展開」『小郡市史第一巻 通史編』小郡市史編集委員会

片岡宏二 2001「20 大板井遺跡」『小郡市史第四巻 資料編 原始・古代』小郡市史編集委員会

九州大学文学部考古学研究室編 1995『大板井遺跡』小郡市史編集委員会

久住愛子・久住猛雄 2008「九州Ⅰ（福岡県）―福岡県下における弥生時代から古墳時代前期の井戸について―」『井戸再考』第 57 回埋蔵文化財研究報告 埋蔵文化財研究会

西谷正 1996「第三章第三節 小国の形成と東アジア」『小郡市史第一巻 通史編』小郡市史編集委員会

表1　大崎後原遺跡2　出土土器観察表

【凡例】　以下の省略名称を使用する。

・器種＝土師器:土、弥生土器:弥

・法量、状態＝口:口径、器:器高、底:底径、口縁部:口、頸部:頸、胴部:胴、体部:体、頂部:頂、杯部:杯、脚部:脚、裾部:裾

・胎土＝精良:0.5mm未満、微砂:0.5mm以上～1.0mm未満、細砂:1.0mm以上～2.0mm未満、砂礫:2.0mm以上

・鉱物=石英:石、長石:長、雲母:雲、角閃石:角、赤色粒子:赤

・色調＝農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帳』2002年度版

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量cm（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整技法	残存率	備考
7-1		A区SK1	土、弥	口:(27.8) 器:8.7	外:にぶい黄橙(10YR7/4) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良	外:ロナデ、頸ハケメ後ナデ、胴ハケメ 内:ロナデ、頸ハケメ・ナデ、胴ヘラ削り	口～胴上約1/4	内外面のロ～頸にススト付着
7-2		A区SK1	土、鉢か 弥	器:11.3	外:明赤褐(5YR5/6) 内:にぶい黄橙(10YR6/3)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:把押さえ、胴工具ナデ 内:ヘラ削り	把手約1/1	
7-3		A区SK3	土、弥	口:(11.4) 器:7.9	内外:にぶい黄橙(10YR7/3)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:ロヨコナデ、胴ハケメ 内:ロヨコナデ、胴押さえ・ナデ	口～胴上約1/4	外面胴にコゲあり
7-4		A区SE1	弥、弥	口:(18.0) 器:3.7	外:にぶい黄橙(10YR6/4) 内:褐灰(10YR5/1)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:頸ハケメ 内:口工具痕、頸押さえ	口～頸約1/6	内面にススト付着
7-5		A区SE1	弥、壺	底:5.2	外:灰黄(2.5Y6/2) 内:にぶい黄橙(10YR6/3)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:胴下ヘラミガキ 内:頸絞り、胴ハケメ後ナデ・押さえ	頸～胴上約1/4 胴下～底約1/1	内面胴にススト付着
7-6		A区SE1	弥、壺	口:7.05	外:明赤褐(5YR5/6) 内:にぶい黄(2.5Y6/3)	微砂:石、長	良	外:ロヨコナデ、頸～胴ヘラミガキ 内:ロヨコナデ、頸絞り、胴押さえ	口～頸約4/5 頸～胴約1/5	精製土器 外面に全面丹 内面胴下にコゲあり
7-7	8	A区SE1	弥、壺	口:7.9 底:6.2 器:20.1	内外:にぶい橙(7.5YR7/4)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:頸～胴ヘラ磨き 内:ロヨコナデ、頸絞り痕、胴押さえ＋ナデ	約1/1	外面に黒斑 内面胴にススト付着
7-8		A区SE2	弥、壺	口:(19.0) 器:6.7	外:浅黄(2.5Y7/3) 内:黄灰(2.5Y4/1)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲	良	外:ロヨコナデ、胴ハケメ 内:ロ～胴ハケメ	口～胴上約1/5	
7-9		A区SE2	弥、壺	底:9.0 器:7.8	外:灰黄褐(10YR4/2) 内:黄灰(2.5Y4/1)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:ハケメ 内:底押さえ	胴下～底約1/1	内面にススト付着
7-10		A区SE2	弥、鉢	口:(16.8) 器:4.9	外:灰黄(2.5Y6/2) 内:にぶい黄橙(10YR6/4)	細砂:石・長 微砂:雲・赤	良	外:ロナデ、胴押さえ 内:口～胴ナデ	口～胴上約1/10	外面に黒斑
7-11		A区SD1	弥、壺	口:(27.0) 器:6.0	外:にぶい黄橙(10YR6/3) 内:灰黄褐(10YR6/2)	細砂:石、長、雲 微砂:赤	良 好	外:ロ～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:ロ～頸ヨコナデ、胴ハケメ	口～胴上約1/4	
7-12		A区SD1	弥、壺	口:(39.5) 器:12.3	内外:にぶい褐(7.5YR6/4)	砂礫:石 細砂:長、雲、赤	良	外:ロ～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:ロ～頸ヨコナデ、胴押さえ・強いナデ	口～胴上約1/4	
7-13		A区SD1	弥、壺	口:(16.0) 器:4.5	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:にぶい黄橙(10YR6/3)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:ロ～頸ナデ、胴ハケメ 内:ロ～頸ナデ、胴押さえ・ナデ	口～胴上約1/4	口に2個1対の穿孔1組
7-14	8	A区SD1	弥、壺	口:9.2 底:8.6 器:24.3	外:赤褐(2.5YR4/6) 内:灰白(10YR8/2)	細砂:石、長 微砂:雲	良	外:ロ～頸ヘラミガキ、胴ハケメ 内:ロヨコナデ、頸押さえ・絞り、胴ナデ	ほぼ完形	精製土器 内面の胴部にススト付着
11-1		B区SD1	土、弥	口:(15.6) 器:6.2	外:橙(5YR6/6) 内:灰黄(2.5Y7/2)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良 好	外:ロ～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:ロハケメ、頸部ナデ、胴ヘラ削り	口～胴上約1/4	
11-2		B区SD1	土、器台	器:6.8	内外:にぶい橙(7.5YR7/4)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:杯ハケメ、脚ヘラミガキ・ハケメ 内:杯ヘラ磨き、胴ハケメ	杯下～脚約1/1	
11-3	9	B区SD1	須、坏蓋	口:12.3 器:4.05	外:黒(10YR1.7/1) 内:褐灰(10YR4/1)	微砂	良	外:回転ヘラ削り、回転ヨコナデ 内:ナデ	口～底約4/5	外面にヘラ記号
17-1		C区SD1上層	土、壺	口:(15.8) 器:5.1	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:ロ～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:ロ～胴ハケメ、胴ヘラ削り	口～胴上約1/2	外面頸にススト付着
17-2	9	C区SD1上層	土、壺	口:(16.4) 器:8.5	外:にぶい橙(7.5YR6/4) 内:橙(7.5YR6/6)	細砂:石、長 微砂:赤	良	外:胴ハケメ 内:頸ハケメ、胴ヘラ削り	口～胴上約1/2	
17-3		C区SD1上層	土、壺	口:(14.4) 器:8.0	外:にぶい橙(7.5YR6/4) 内:にぶい黄橙(10YR6/4)	細砂:石、長 微砂:赤	良	外:ロ～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:ロ～胴ハケメ	口～胴上約1/3	外面の胴にコゲあり
17-4		C区SD1上層	土、壺	口:17.6 器:6.4	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:橙(7.5YR7/6)	細砂:石、長 微砂:赤	良	外:頸ハケメ、胴ハケメ後ナデ 内:頸ハケメ	口～胴上約2/3	

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量cm（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整技法	残存率	備考
17-5		C区SD1上層	土 壺	底:4.6 器:24.95	外:にぶい褐(7.5YR5/3) 内:橙(5YR6/6)	砂礫:石、長 微砂:赤、角	良	外:ハケメ・タタキ 内:ハケメ	頸～胴上約1/3 胴下～底約1/1	底付近に穿孔あり
17-6	9	C区SD1上層	土 壺	底:5.1 器:27.3	外:浅黄(2.5Y7/4) 内:浅黄橙(10YR8/4)	砂礫:長 細砂:石 微砂:赤	良 好	外:タタキ後ハケメ後ナデ 内:ハケメ	頸～底約1/1	外面はスス付着
17-7		C区SD1上層	土 壺	口:(15.4) 器:23.2	外:浅黄橙(10YR8/3) 内:にぶい黄橙(10YR6/4)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:ハケメ 内:ハケメ	口～胴下約1/4	外面頸直下の胴に帯状のスス付着
17-8	9	C区SD1上層	土 壺	口:26.2 底:6.0	外:橙(7.5YR7/6) 内:浅黄橙(10YR8/4)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良 好	外:ハケメ 内:ハケメ	口約7/8 頸～胴上約1/2 胴下～底約1/1	外面胴中位に黒斑2箇所あり
17-9	9	C区SD1上層	土 壺	口:25.4 底:4.8 器:32.2	外:にぶい黄橙(10YR7/2) 内:にぶい黄橙(10YR6/4)	砂礫:石 細砂:長、雲、赤	良 好	外:口ハケメ後押さえ、胴タタキ後ハケメ 内:ハケメ、頸ハケメ後押さえ	口～底約1/3	
18-1	9	C区SD1上層	土 壺	口:13.3 器:7.7	外:にぶい橙(7.5YR6/4) 内:褐灰(10YR4/1)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:口ヨコナデ、頸～胴ヘラミガキ 内:口ヨコナデ、頸上ヘラミガ	口～胴上約1/1	
18-2		C区SD1上層	土 壺	口:23.6 器:8.0	外:にぶい黄橙(10YR7/4) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良	外:口ヨコナデ、頸～胴ハケメ 内:頸ハケメ、胴押さえ	口～胴上約2/3	
18-3		C区SD1上層	土 高杯	裾:9.5 器:7.1	外:浅黄色(2.5Y7/3) 内:にぶい黄(2.5Y6/3)	微砂:石、長、雲、赤	良	外:脚ヘラミガキ・ヨコナデ 内:脚ヨコナデ	脚～裾約3/4	
18-4		C区SD1上層	土 高杯	裾:12.2 器:7.2	外:にぶい黄橙(10YR7/4) 内:にぶい黄橙(10YR6/4)	砂礫:石 微砂:長、雲、赤	良	外:脚ヘラミガキ 内:脚ハケメ	脚～裾約1/1	裾の穿孔は3個残存
18-5	9	C区SD1上層	土 高杯	裾:11.9 器:9.6	外:にぶい黄褐(10YR5/4) 内:にぶい褐(7.5YR5/4)	砂礫:石 微砂:長、赤	良	外:杯ハケメ、脚マメツ 内:杯ハケメ、脚ヘラ削り・ハケメ	杯～裾約5/6	裾の穿孔は2個残存
18-6		C区SD1上層	土 器台	口:10.2 裾:10.9 器:8.6	外:橙(5YR6/6) 内:橙(5YR6/8)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:杯ハケメ・ヘラミガキ、脚ヘラミガキ 内:杯ナデ、脚ハケメ	口～杯約1/2 脚～裾約5/6	脚の穿孔は3個
18-7	9	C区SD1上層	土 器台	口:8.2 裾:10.1 器:7.0	内外:にぶい橙(7.5YR6/4)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:杯マメツ、脚ナデ 内:杯マメツ、脚ハケメ	口～坏約1/1 脚～裾約1/2	
18-8		C区SD1上層	土 鉢	口:25.9 底:2.4 器:10.3	外:にぶい橙(7.5YR7/3) 内:にぶい橙(7.5YR6/4)	砂礫:石、長 微砂:赤	良	外:胴上ヨコナデ、胴下タタキ 内:胴上ナデ、胴下ハケメ後ナデ	口～底約1/1	外面にスス付着 底の穿孔は焼成前
18-9	9	C区SD1上層	土 坏	口:(12.2) 底:1.9 器:4.9	外:にぶい黄橙(10YR7/4) 内:にぶい黄橙(10YR6/4)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良	外:マメツ 内:マメツ	口～胴上約1/5 胴下～底約1/1	底の外面にスス付着
18-10	9	C区SD1上層	土 坏	口:12.6 器:4.7	外:橙(5YR6/6) 内:明赤褐(5YR5/6)	砂礫:石 細砂:長 微砂:赤	良	外:マメツ 内:ヨコナデ	口～底約4/5	外面にヘラ記号か？
18-11	9	C区SD1上層	土 製塩土器	口:(6.4) 底:1.2 器:13.0	外:にぶい橙(7.5YR7/4) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	砂礫:石、長 微砂:赤	良	外:ヘラ削り 内:胴上押さえ、胴下ヘラ削り	口～底約3/4	内面下半にスス付着
18-12	9	C区SD1上層	土 支脚	器:14.6	外:橙(2.5YR7/8)	砂礫:石 微砂:長、赤	良	指押さえ	約3/4	頂と底が一部欠損
19-1		C区SD1中・下層	弥 壺	口:(23.8) 器:10.05	外:にぶい褐(7.5YR5/3) 内:にぶい黄橙(10YR7/2)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良	外:口ヨコナデ、胴ハケメ 内:口ヨコナデ、胴マメツ	口～胴上約1/5	
19-2		C区SD1中・下層	弥 壺	口:(28.3) 器:7.3	外:にぶい赤褐(5YR5/3) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	砂礫:石 細砂:長 微砂:雲、赤	良	外:口ヨコナデ、胴ハケメ 内:マメツ	口～胴上約1/6	外面にコゲあり
19-3		C区SD1中・下層	弥 壺	口:(20.6) 器:7.6	外:灰黄褐(10YR5/2) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	細砂:石 微砂:長、雲	良	外:口～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内:口～頸刻目、胴ハケメ	口～胴上約1/4	外面にコゲあり 内面口に刻目あり
19-4		C区SD1中・下層	弥 壺	口:(37.0) 器:19.2	外:にぶい橙(5YR7/4) 内:暗灰黄(2.5Y5/2)	砂礫:石、長 微砂:雲、赤	良 好	外:口～頸マメツ、胴ハケメ 内:ハケメ	口～胴上約1/8	
19-5	10	C区SD1中・下層	弥 壺	口:30.5 器:15.6	外:にぶい黄橙(10YR6/3) 内:灰黄褐(10YR6/2)	砂礫:石、長、雲 微砂:赤	良	外:口～頸ヨコナデ、胴ハケメ・方形突帯 内:口～頸ハケメ、胴ハケメ後ナデ	口～胴上約1/5	外面胴に方形突帯1条

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量cm（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整技法	残存率	備考
19-6		C区SD1中・下層	弥．壺	口：(20.8) 器：10.0	外：にぶい黄橙(10YR7/2) 内：にぶい黄橙(10YR7/3)	砂礫：石、長 微砂：赤	良	外：口～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内：口～頸ヨコナデ、胴ハケメ	口～胴上約1/4	内面口に凹み1箇所
19-7	10	C区SD1中・下層	弥．壺	口：15.4 器：15.0	外：灰黄(2.5Y7/2) 内：暗灰黄(2.5Y5/2)	砂礫：石、長 微砂：雲	良	外：口～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内：口～頸ハケメ、胴押さえ	口約2/3頸約1/1胴約1/2	外面口～胴上にスス付着
19-8	10	C区SD1中・下層	弥．壺	口：17.2 底：9.0 器：18.1	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	砂礫：石、長 微砂：雲、赤、角	良	外：口～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内：口～胴ハケメ、胴下押さえ	口約3/4頸～底約1/1	外面口～胴上に黒斑あり 内面口～胴上に丹あり
20-1	10	C区SD1中・下層	弥．壺	口：26.5 底：9.2 器：29.3	内外：橙(5YR6/6)	細砂：石、長、雲	良 好	外：口～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内：口～頸ヨコナデ、胴ナデ	口～底約3/4	外面全面にスス付着 内面頸下～底にスス付着
20-2	10	C区SD1中・下層	弥．壺	口：26.7 底：9.6 器：33.1	外：浅黄(2.5Y7/3) 内：浅黄橙(10YR8/4)	砂礫：石 細砂：長 微砂：赤	良	外：口～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内：口～胴ハケメ、底押さえ	ほぼ完形（胴部の み約5/6）	外面胴上にスス付着 内面胴上～底部スス付着
20-3	10	C区SD1中・下層	弥．壺	口：30.2 底：10.0 器：33.25	外：にぶい褐(7.5YR5/3) 内：浅黄橙(7.5YR8/3)	砂礫：石、赤 細砂：長	良	外：口～頸ヨコナデ、胴ハケメ 内：口～胴ハケメ、底押さえ	口約4/5頸～底完形	外面全面にスス付着 内面底にスス付着
20-4		C区SD1中・下層	弥．壺	口：(31.8) 器：5.0	外：赤(10YR4/6) 内：赤褐(2.5YR4/6)	砂礫：石 微砂：長	良	外：胴上M字突帯1条 内：口縁文、胴工具ナデ	口～胴上約1/4	精製土器（全面丹塗り） 口縁内面の櫛文は直線
20-5		C区SD1中・下層	弥．壺	底：11.0 器：10.2	外：灰黄褐(10YR6/2) 内：にぶい黄橙(10YR7/2)	砂礫：石 細砂：長 微砂：雲、赤	良	外：胴ハケメ 内：胴押さえ	胴下～底約1/1	外面にスス付着 内面の底部にスス付着 内面底部に放射線状の工具痕
20-6	10	C区SD1中・下層	弥．壺	底：10.0 器：18.3	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：浅黄橙(7.5YR8/3)	砂礫：石、長 微砂：雲、赤、角	良	外：胴ハケメ 内：胴ナデ、底押さえ	胴約1/2底約1/1	
21-1		C区SD1中・下層	弥．壺	口：(30.2) 器：9.75	外：橙(7.5YR7/6) 内：橙(5YR7/8)	砂礫：石、長 微砂：赤	良	外：頸ハケメ・ナデ 内：口～頸ナデ	口～頸約1/4	
21-2	10	C区SD1中・下層	弥．壺	器：11.05	外：明赤褐(2.5YR5/6) 内：にぶい褐(7.5YR6/5)	砂礫：石 細砂：長 微砂：雲、赤	良	外：胴ナデ・方形突帯1条・M字突帯1条 内：胴マメツ	胴上約1/6	精製土器 外面全面丹塗り 内面にスス付着
21-3		C区SD1中・下層	弥．壺	器：12.7	外：赤灰(2.5YR5/1) 内：灰黄褐(10YR6/2)	砂礫：石 微砂：長、雲	良 好	外：胴ナデ・断面三角形突帯2条・ハケメ 内：胴ハケメ・押さえ	胴上約1/8	精製土器 外面全面丹塗り 外面胴下にスス付着
21-4	10	C区SD1中・下層	弥．壺	底：7.3 器：15.3	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：灰黄(2.5Y7/2)	砂礫：石 細砂：長 微砂：雲、赤	良	外：胴ハケメ 内：胴ハケメ・押さえ、底工具ナデ	胴～底約1/1	外面胴～底に黒斑あり 内面の胴部にスス付着
21-5		C区SD1中・下層	弥．壺	底：10.6 器：4.6	内外：浅黄橙(10YR8/3)	砂礫：石、長 微砂：赤	良	外：胴ハケメ後ナデ 内：胴ハケメ・押さえ	胴下～底約4/5	外面底にスス付着
21-6		C区SD1中・下層	弥．壺	底：12.6 器：10.2	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：浅黄橙(10YR8/3)	砂礫：石 細砂：長 微砂：赤	良	外：胴ハケメ 内：胴ナデ、底押さえ	胴下約1/2底約1/1	
21-7	10	C区SD1中・下層	弥．壺	口：13.4 底：7.6 器：13.3	内外：にぶい橙(7.5YR7/4)	砂礫：石、長 微砂：雲、赤	良	外：口～頸ナデ、胴ハケメ 内：口～頸ナデ、胴指押さえ	口～胴下約1/2胴下～底約1/1	外面は胴上～底にスス付着 内面は胴にスス付着 口に穿孔1個残存
21-8	10	C区SD1中・下層	弥．壺	口：14.7 底：7.0 器：13.8	外：赤(10YR5/6) 内：にぶい黄(2.5Y6/4)	砂礫：石 微砂：長 精良：赤	良 好	外：胴上ヘラミガキ、胴下ハケメ 内：口ヘラミガキ、頸ヨコナデ、胴押さえ・ナデ・工具ナデ	口～底約4/5	精製土器 外面全面、内面口～胴上に丹塗り 口に2個1対の穿孔2組
21-9	10	C区SD1中・下層	弥．壺	口：14.7 底：9.2 器13.65	外：淡黄(2.5Y8/3) 内：にぶい褐(7.5YR6/3)	砂礫：石、長 微砂：雲、赤	良 好	外：胴ハケメ 内：頸～胴ナデ、胴ハケメ・押さえ・ナデ	口約6/7頸～底完形	外面全面、内面口～胴上に丹塗り 底に穿孔あり、 頸の穿孔は2個1対 外面底にスス付着
21-10		C区SD1中・下層	弥．壺	口：(21.2) 器：7.35	外：明赤褐(2.5YR5/6) 内：にぶい黄橙(10YR7/3)	砂礫：石 微砂：長、雲、赤	良	外：口～胴ヨコナデ・ハケメ 内：口～胴ヨコナデ	口～胴上約1/4	外面全面、内面口丹塗り
21-11	10	C区SD1中・下層	弥．壷	口：(16.2) 器：2.2	外：赤褐(2.5YR3/6) 内：にぶい黄橙(10YR7/3)	細砂：石、長 微砂：雲、赤	良	外：マメツ 内：ヘラミガキ後ナデ	口～頂約1/2	外面全面丹塗り 穿孔は2個1対が1組
21-12		C区SD1中・下層	弥．壷	口：14.2 器：3.0	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：にぶい橙(7.5YR6/4)	砂礫：石 細砂：長 微砂：赤	良	外：ナデ 内：マメツ	口～頂約3/4	外面全面丹塗り 穿孔は2個1対が1組
22-1	10	C区SD1中・下層	弥．高杯	口：25.1 器：14.7	外：浅黄橙(7.5YR8/4) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	砂礫：石、長 微砂：雲、赤	良	外：口ヨコナデ、脚ヘラミガキ 内：口ヨコナデ、脚絞り	口約1/3杯～脚約1/1	外面全面、内面杯丹塗り 円盤充填方式
22-2	10	C区SD1中・下層	弥．高杯	口：26.0 器：18.4	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：灰白(2.5Y8/2)	細砂：石、長 微砂：雲、赤	良	外：口縁文、脚ヘラミガキ 内：坏ヘラミガキ、脚絞り	口～脚約1/1	外面全面、内面杯丹塗り 円盤充填方式 外面口縁文は直線
22-3	11	C区SD1中・下層	弥．高杯	口：31.0 器：18.3	外：にぶい褐(7.5YR6/3) 内：にぶい橙(7.5YR7/3)	砂礫：石、長 微砂：雲、赤	良	外：口ナデ、坏ハケメ、脚ヘラミガキ 内：口ヨコナデ、坏ヘラミガキ、脚絞り	口約2/3杯～脚約1/1	外面全面、内面杯丹塗り 外面口の縁文は斜線

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量cm（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整技法	残存率	備考
22-4		C区SD1中・下層	弥．高杯	口：(19.2) 器：8.4	外：にぶい黄橙(10YR7/2) 内：にぶい黄橙(10YR6/4)	砂礫：石 細砂：長 微砂：雲、赤	良	外：坏ハケメ 内：坏ハケメ	口～杯約1/4	
22-5	11	C区SD1中・下層	弥．鉢	口：20.0 底：7.2 器：11.1	外：にぶい橙(7.5YR7/3) 内：にぶい黄橙(10YR7/3)	砂礫：石 細砂：長 微砂：雲、赤	良	外：ロナデ、胴ハケメ 内：胴押さえ	口～底約1/2	
22-6	11	C区SD1中・下層	弥．鉢	口：17.35 底：5.7 器：9.8	内外：にぶい黄橙(10YR6/3)	砂礫：石 細砂：長 微砂：雲、赤	良	外：ロナデ、胴ハケメ 内：ロナデ	口～底約4/5	外面胴上～底に黒斑
22-7		C区SD1中・下層	弥．鉢	口：16.2 底：5.6 器：9.85	外：灰白(2.5Y7/1) 内：灰黄(2.5Y6/2)	砂礫：石、長 微砂：赤	良	外：胴上ハケメ 内：胴上ハケメ、底押さえ	口～頸小片 胴～底約1/2	外面頸～胴に黒斑
22-8		C区SD1中・下層	弥．手捏	口：9.2 底：3.8 器：4.7	外：灰褐(7.5YR5/2) 内：褐灰(7.5YR5/1)	砂礫：石、長 微砂：雲、赤	良	外：ロナデ、胴押さえ 内：ロナデ、胴押さえ	口～底約1/2	内面にスス付着
22-9	11	C区SD1中・下層	弥．手捏	口：11.0 底：6.5 器：7.8	外：にぶい褐(7.5YR5/4) 内：にぶい橙(7.5YR6/4)	砂礫：石、長 微砂：雲、赤	良	外：ロナデ、胴押さえ、底ハケメ 内：ロナデ、胴ハケメ、底押さえ・ナデ	完形	外面に黒斑 内外面にスス付着
22-10	11	C区SD1中・下層	土．支脚	根：7.0 器：7.4	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：にぶい黄橙(10YR7/3)	砂礫：石、長 微砂：雲、赤	良	外：押さえ 内：絞り	体～裾約1/1	
22-11	11	C区SD1中・下層	土．支脚	根：10.7 器：9.8	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：灰黄褐(10YR6/2)	砂礫：石、長 微砂：雲、赤	良	外：押さえ 内：マメツ	口～裾約3/4	
22-12	11	C区SD1中・下層	土．支脚	根：13.1 器：7.2	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：明黄褐(10YR6/6)	砂礫：石 細砂：長 微砂：雲、赤	良	外：押さえ 内：絞り	体～裾約3/4	

表2　大崎後原遺跡2　出土石器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	石材	計測値				備考
					長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
23-1	11	C区SD1下層	石庖丁	粘板岩	7.9	3.9	0.65		刃部に刃こぼれ、両面磨ぎ、穿孔部2個残存、内1個は一部欠損
23-2	11	C区SD1中層	砥石	粘板岩	13.5	6.8	4.3		砥面4面
23-3	11	C区SD1中層	砥石	頁岩	13.2	11.1	6.1		砥面3面

表3　大崎後原遺跡2　出土木器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構	種別	計測値（単位：cm）					木取り	備考
				長さ	径	幅	厚さ	杭先・先端長		
8－1	8	A区SE2	杭	36.8	2.6	―	―	5	心持材	
8－2	8	A区SE2	杭	83.1	9	―	―	―	心持材	杭先欠損、炭化処理による焼きしめ
8－3	8	A区SE2	敲放し	86.3	―	14.6	3.8	―	板目材	抉った痕が2ヶ所あり

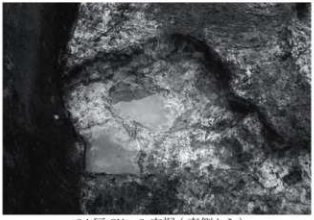
図版1

2Ａ区 全景（西側から）

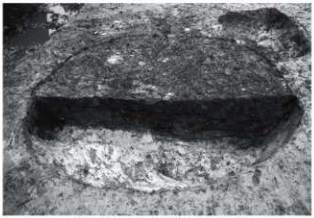
2A区 SK－1 土層（西側から）

2A区 SK－ 2 土層・完掘（南側から）

2A区 SK－1 完掘（南側から）



2A区 SK－3 完掘（東側から）


2A区 SK－4 土層（東側から）

2A区 SE－1 土層（北東側から）

2A区 SK－4 完掘（東側から）

2A区 SE－1 完掘（北東側から）

2A区 SK－5 土層（北側から）

2A区 SE－2 土層（西側から）

2A区 SK－5 完掘（西側から）

2A区 SE－2 完掘（西側から）

図版3

2A区 SE－2 下層・建築材（西側から）

2A区 SE－3 土層（西側から）

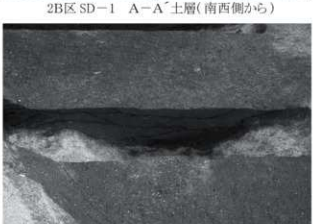
2A区 SD－1 土層（南側から）

2A区 SD－1 完掘（北側から）

2 B 区 全景 (南側から)

2B区 SD－1　A－A´土層(南西側から)

2B区 SD－1　C－C´土層(南西側から)



2B区 SD－1　B－B´土層(南西側から)

2B区 SD－1 完掘 (西側から)

図版5

2 C 区 全景（北側から）

2C区 SB－1 P1 土層（南側から）

2C区 SB－1 P3 土層（南側から）

2C区 SB－1 P2 土層（南側から）

2C区 SB－1 P4 土層（南側から）

2C区 SB－1 P5 土層（南側から）

2C区 SK－1 完掘（西側から）

2C区 SB－1 P6 土層（南側から）

2C区 SK－2 土層（北側から）

2C区 SB－1 P7 土層（南側から）

2C区 SK－2 完掘（北側から）

2C区 SB－1 全景（西側から）

2C区 SE－1 土層・完掘（北側から）

図版7

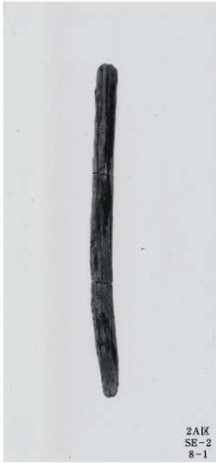
2C区 SD－1 A-A' 土層（東側から）

2C区 SD－1 B-B' 土層（東側から）

2C区 SD－1 全景（北側から）

2A区
SE-1
7-7

2A区
SD-1
7-14



2A区
SE-2
8-1

2A区
SE-2
8-2

2A区
SE-2
8-3表

2A区
SE-2
8-3裏

2A区
SE-2
9-1

図版9

2B区
SD-1
11-3

2C区
SD-1
17-2

2C区
SD-1
17-6

2C区
SD-1
17-8

2C区
SD-1
17-9

2C区
SD-1
18-1

2C区
SD-1
18-5

2C区
SD-1
18-7

2C区
SD-1
18-9

2C区
SD-1
18-10

2C区
SD-1
18-11

2C区
SD-1
18-12

2C区
SD-1
19-5

2C区
SD-1
19-7

2C区
SD-1
19-8

2C区
SD-1
20-1

2C区
SD-1
20-2

2C区
SD-1
20-3

2C区
SD-1
20-6

2C区
SD-1
21-2

2C区
SD-1
21-4

2C区
SD-1
21-7

2C区
SD-1
21-8

2C区
SD-1
21-9

2C区
SD-1
21-11

2C区
SD-1
22-1

2C区
SD-1
22-2

図版 11

2C区
SD-1
22-3

2C区
SD-1
22-5

2C区
SD-1
22-6

2C区
SD-1
22-9

2C区
SD-1
22-10

2C区
SD-1
22-11

2C区
SD-1
22-12

2C区
SD-1
23-1

2C区
SD-1
23-3

2C区
SD-1
23-2

	報　告　書　抄　録
ふりがな	おおさきうしろばるいせき２
書名	大崎後原遺跡２
副書名	
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第２５６集
編著者名	坂井　貴志・西江　幸子
編集機関	小郡市教育委員会　小郡市埋蔵文化財調査センター
所在位置	〒838-0106　福岡県小郡市三沢 5147 － 3　℡ 0942 － 75 － 7555
発行年月日	平成 23 年 3 月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大崎後原（おおさきうしろばる）遺跡２（いせき）	福岡県（ふくおかけん）小郡市（おごおりし）小郡地内	40216		33°23′10″	130°33′14″	2009.7.6 ～ 2009.8.18	190 ㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大崎後原遺跡２Ａ	集落	弥生時代中期後半～末 古墳時代後期	土坑 井戸 溝	弥生土器 土師器 木器 編組品	
大崎後原遺跡２Ｂ	集落	古墳時代末	土坑 溝	土師器 須恵器	
大崎後原遺跡２Ｃ	集落	弥生時代中期後半～末 古墳時代初頭～前期	掘立柱建物跡 土坑 井戸 溝	弥生土器 土師器 石器	

大崎後原遺跡２は、小郡市を縦断する宝満川西岸の低台地縁辺部、標高 11 m前後に立地する。調査では弥生時代中期後半から末頃にかけての井戸や、土器などが大量に廃棄された溝など良好な資料を得ることができた。本遺跡の中心となる弥生時代中期後半から末頃にかけては、拠点集落である小郡・大板井遺跡群が北に約 1.6㎞ の所にあることから、遺跡の立地的にも生活域の拡大の中で派生してできた集落として発展した一部が、今回の調査で得られたと考えられよう。

大崎後原遺跡２

小郡市文化財調査報告書第 256 集
平成 23 年 3 月 31 日
発行　小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡 255-1
出版　片山印刷有限会社
福岡県小郡市祇園 1-8-15